

IBM Marketing Platform

バージョン 9 リリース 0

2013 年 1 月 15 日

インストール・ガイド

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、87 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Marketing Platform バージョン 9 リリース 0 モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Marketing Platform
Version 9 Release 0
January 15, 2013
Installation Guide

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2013.12

© Copyright IBM Corporation 1999, 2013.

目次

第 1 章 IBM のインストールの準備 . . . 1

Marketing Platform 基本インストールのチェックリスト	1
他のシステム・コンポーネントと一緒にインストールする	2
前提条件	3
システム要件	3
必要な知識	4
必要な権限	4
アップグレードの場合	4

第 2 章 IBM Marketing Platform データ・ソースの準備 5

ステップ: Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマの作成	5
ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する	6
ステップ: Web アプリケーション・サーバーでの JDBC 接続の作成	7
JDBC 接続の作成に関する情報	7
Marketing Platform データベース情報チェックリスト	9

第 3 章 IBM Marketing Platform のインストール 11

IBM EMM インストーラーが機能する方法	11
インストーラー・ファイルに関する単一ディレクトリーの要件	12
JAVA_HOME 環境変数の確認	12
製品のインストール・ディレクトリーの選択	13
インストール・タイプ	13
インストール・モード	13
不在モードを使用した複数回にわたるインストール	14
システム・テーブルの自動作成と手動作成	16
IBM サイト ID	16
IBM EMM インストーラーの終了コード	16
Marketing Platform コンポーネントをインストールする場所	18
ステップ: 必要な情報の入手	18
ステップ: IBM インストーラーの実行	20
ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる	21

第 4 章 IBM Marketing Platform の配置 23

WebLogic 上に Marketing Platform を配置する際のガイドライン	23
すべてのバージョンの WebSphere に Marketing Platform を配置する際のガイドライン	24
ステップ: Marketing Platform のインストールの検証	26

第 5 章 配置後の IBM Marketing Platform の構成 29

デフォルト・パスワード設定を変更するには	29
--------------------------------	----

第 6 章 IBM Marketing Platform のアップグレード 31

全 IBM EMM 製品に関するアップグレード前提条件	31
Oracle または DB2 のみ: 自動コミット要件	32
ユーザー定義のグループ名および役割名の確認	32
タイム・ゾーン・サポートに関するスケジュールのアップグレード	32
IBM Digital Analytics ダッシュボード・ポートレットのアップグレード	32
IBM フレーム・セットを再ブランド化した場合	33
Marketing Platform のアップグレードのシナリオ	33
自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法	35
手動マイグレーションでバージョン 8.0.x、8.1.x、8.2.x (8.2.0.7 より前) からアップグレードするには	36
手動マイグレーションでバージョン 8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョンからアップグレードするには	43
手動マイグレーションでバージョン 8.5.x からアップグレードするには	49
手動マイグレーションでバージョン 8.6.x からアップグレードするには	55

付録 A. Marketing Platform ユーティリティについて 61

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティの実行	63
追加マシンで Marketing Platform ユーティリティをセットアップする方法	63
参照: Marketing Platform ユーティリティ	64
configTool ユーティリティ	64
alertConfigTool ユーティリティ	68
datafilteringScriptTool ユーティリティ	68
encryptPasswords ユーティリティ	70
partitionTool ユーティリティ	71
populateDb ユーティリティ	73
restoreAccess ユーティリティ	74
scheduler_console_client ユーティリティ	76
Marketing Platform SQL スクリプトについて	78
参照: Marketing Platform SQL スクリプト	78
すべてのデータの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)	78
データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)	79
システム・テーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql)	79

システム・テーブルの作成	80	プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項	89
付録 B. IBM 製品のアンインストール . .	83		
IBM 製品をアンインストールするには	83		
IBM 技術サポートへの連絡	85		
特記事項	87		
商標	89		

第 1 章 IBM のインストールの準備

インストール・プロセスには、IBM® が提供していない要素を含むいくつかのソフトウェア要素およびハードウェア要素を使用する作業が含まれています。IBM 資料は、IBM EMM 製品のインストール、構成、およびアップグレードについてのガイダンスを提供しています。IBM が提供しているのではないシステムの操作については、それらの製品の資料を参照してください。

IBM EMM ソフトウェアのインストールを始める前に、ビジネス目標と、それをサポートするために必要なハードウェア/ソフトウェア環境の両方を含むインストール計画を立ててください。

Marketing Platform 基本インストールのチェックリスト

この章を読むと、インストール・プロセスの概要を理解して、実際の環境、予定しているインストール順序、および知識レベルが前提条件を満たしていることを確認できます。

以下のリストは、Marketing Platform の基本インストールを実行するために必要なステップの大まかな概要です。これらのステップについての詳細情報は、このガイドの残りの部分で提供されます。

Marketing Platform データ・ソースの準備

1. 5 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマの作成』

Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマを作成して、情報を記録します。

2. 6 ページの『ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する』

Marketing Platform システム・テーブル・データベース用のデータベース・ドライバを Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに追加します。

3. 7 ページの『ステップ: Web アプリケーション・サーバーでの JDBC 接続の作成』

Marketing Platform システム・テーブル・データベースへの JDBC 接続を作成します。接続の JNDI 名として UnicaPlatformDS を必ず使用してください。

Marketing Platform のインストール

1. 11 ページの『第 3 章 IBM Marketing Platform のインストール』

IBM および Marketing Platform のインストーラーをダウンロードします。

2. 18 ページの『ステップ: 必要な情報の入手』

必要なデータベースおよび Web アプリケーション・サーバーの情報を収集します。

3. 20 ページの『ステップ: IBM インストーラーの実行』

IBM インストーラーは、同じディレクトリー内に検出されるすべての製品のインストーラーを起動します。

4. 21 ページの『ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる』

インストーラーによる Marketing Platform システム・テーブルの自動作成が企業のポリシーで許可されない場合、または接続の失敗のため自動作成が行われなかった場合には、手動でテーブルを作成します。

Marketing Platform の配置

1. 23 ページの『第 4 章 IBM Marketing Platform の配置』

WebSphere® または WebLogic の固有のガイドラインに従います。

2. 26 ページの『ステップ: Marketing Platform のインストールの検証』

IBM EMM にログインして基本機能を検査します。

Marketing Platform の構成

1. 29 ページの『第 5 章 配置後の IBM Marketing Platform の構成』

オプションとして、パスワード制約を設定します。

2. いずれかの IBM Enterprise 製品でレポート作成機能を使用する予定の場合は、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

他のシステム・コンポーネントと一緒にインストールする

次の図は、IBM アプリケーションをインストールする場所について概要を示しています。この図はすべての製品を示していますが、そのすべてが必要とは限りません。

このセットアップは、基本的なインストールを表しています。セキュリティー上およびパフォーマンス上の実際の要件を満たすために、より複雑で分散したインストールが必要になることがあります。

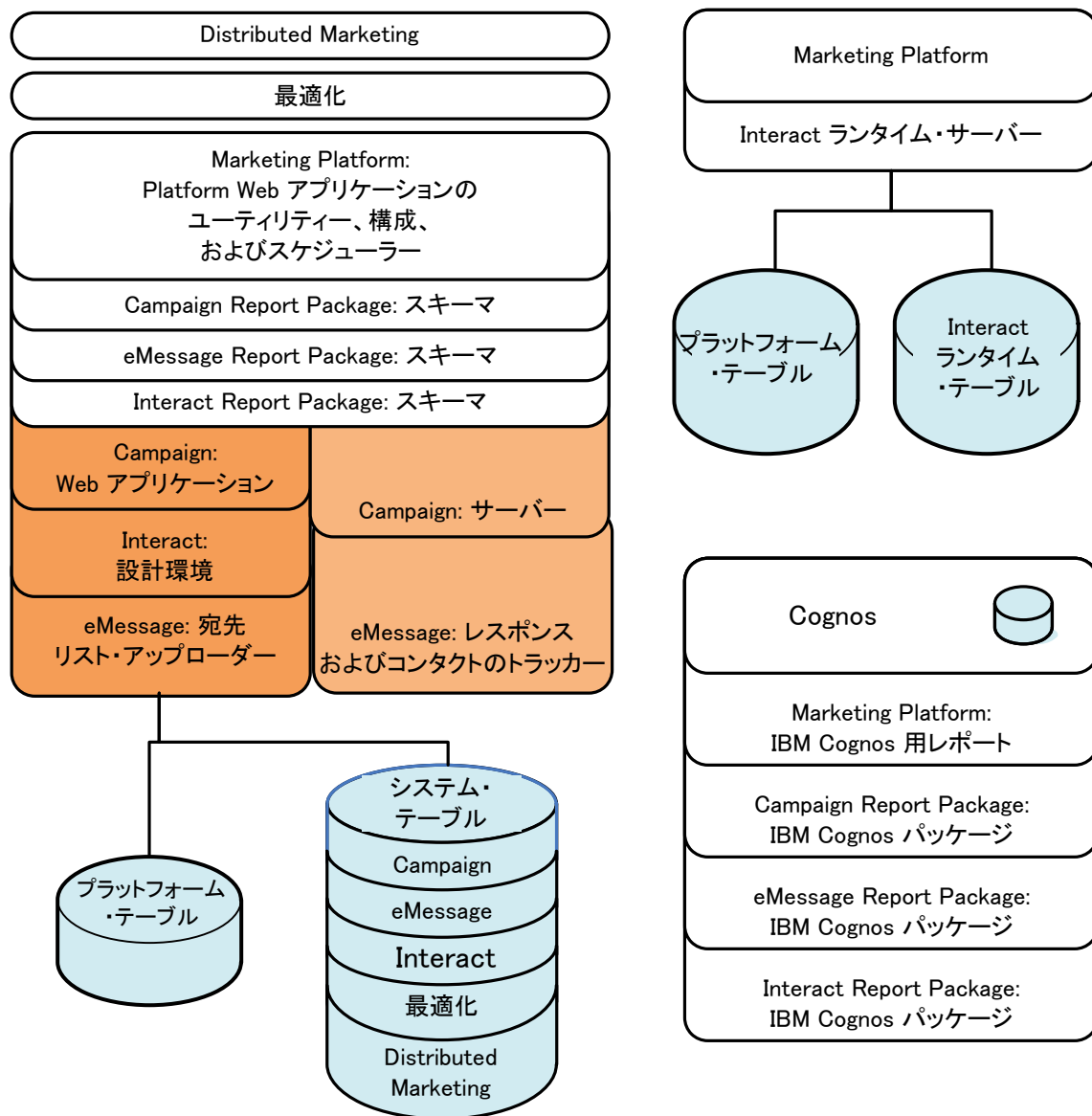


図 1. IBM EMM のコンポーネント

前提条件

IBM EMM 製品をインストールするための前提条件は、以下のとおりです。

システム要件

詳細なシステム要件については、「推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件」ガイドを参照してください。

JVM の要件

スイートに属する IBM EMM アプリケーションは、専用の Java™ 仮想マシン (JVM) 上に配置する必要があります。IBM EMM 製品は、Web アプリケーション

ン・サーバーによって使われる JVM をカスタマイズします。JVM に関するエラーが発生する場合、IBM EMM 製品に専用の Oracle WebLogic または WebSphere ドメインの作成が必要になることがあります。

ネットワーク・ドメインの要件

スイートとしてインストールする IBM EMM 製品は、クロスサイト・スクリプティングのセキュリティ・リスクを軽減するために設計されたブラウザー制限に準拠するために、同じネットワーク・ドメイン上にインストールする必要があります。

必要な知識

IBM EMM 製品をインストールするためには、製品のインストール先となる環境に関する詳細な知識を持っている必要があります (または、そのような知識を持つスタッフと共に作業する必要があります)。オペレーティング・システム、データベース、および Web アプリケーション・サーバーに関する知識が必要です。

必要な権限

次のように、このガイドの手順を実行できるネットワーク権限があること、適切な権限を持つログインがあること、およびダウンロードした製品インストール・ファイルに適切な権限があることを確認します。

- Web アプリケーション・サーバー用の管理ログイン名とパスワードが必要です。
- 必要なすべてのデータベースに関する管理アクセス権限が必要です。
- 編集する必要のあるすべてのファイルに関する書き込み権限が必要です。
- ファイルを保存する必要のあるすべてのディレクトリー (例えばインストール・ディレクトリー、アップグレードの場合はバックアップ・ディレクトリー) に関する書き込み権限が必要です。
- Web アプリケーション・サーバーと IBM EMM コンポーネントの実行に使われるオペレーティング・システム・アカウントは、該当するディレクトリーおよびサブディレクトリーに対する読み取り/書き込みアクセス権限を持っている必要があります。
- インストーラーを実行するための適切な読み取り/書き込み/実行権限を持っている必要があります。

UNIX の場合、IBM 製品のインストールを実行するユーザー・アカウントは、その配置場所となる Web アプリケーション・サーバーをインストールしたユーザー・アカウントと同じグループのメンバーでなければなりません。Web アプリケーション・サーバーは製品のファイル・システムにアクセスする必要があるため、こうする必要があります。

- UNIX の場合、IBM 製品のすべてのインストーラー・ファイルは完全な実行権限 (rwxr-xr-x) を持っている必要があります。

アップグレードの場合

アップグレードを行う場合は、31 ページの『第 6 章 IBM Marketing Platform のアップグレード』をお読みください。

第 2 章 IBM Marketing Platform データ・ソースの準備

このセクションでは、Marketing Platform システム・テーブル用のデータベースと JDBC 接続をセットアップするのに必要な情報を示します。この後、インストール・プロセスで IBM インストーラーを実行するときにこのデータベースについての詳細情報を入力する必要があるため、9 ページの『Marketing Platform データベース情報チェックリスト』を印刷して記入してください。

ステップ: Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマの作成

1. Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマを作成するには、データベース管理者と共に作業します。

以下のベンダー固有のガイドラインに従ってください。

- Marketing Platform システム・テーブルが Oracle にある場合、環境がオープンされる度に自動コミットが行われるように構成する必要があります。Oracle 資料の説明を参照してください。
- Marketing Platform システム・テーブルが DB2® にある場合、データベース・ページ・サイズを少なくとも 16k に設定します (Unicode をサポートする必要がある場合は 32k)。DB2 資料の説明を参照してください。
- Marketing Platform システム・テーブルが SQL Server に基づいている場合、Marketing Platform は SQL Server 認証を必要とするため、SQL Server 認証だけを使用するか、または SQL Server と Windows の両方の認証を使用する必要があります。必要に応じて、データベース認証に SQL Server が含まれるようデータベース構成を変更してください。また、SQL Server で TCP/IP を必ず有効にしてください。

マルチバイト文字 (中国語、韓国語、日本語など) を使用するロケールを使用可能にする予定の場合、それらをサポートするようデータベースが作成されていることを確認してください。

2. Marketing Platform システム・テーブルを作成してそれにデータを入れる目的で、使用可能なアカウントを作成するよう、データベース管理者に依頼します。これらの操作はこの後、インストール・プロセスで行われますが、手動で行うことも、IBM EMM インストーラーによって自動的に実行することもできます。

このアカウントは、少なくとも以下の権限を持っている必要があります。

- CREATE TABLES
- CREATE VIEWS (レポート用)
- CREATE SEQUENCE (Oracle のみ)
- CREATE INDICES
- ALTER TABLE
- INSERT

- UPDATE
 - DELETE
3. データベース (またはスキーマ) およびデータベース・アカウントについての情報を入手し、9 ページの『Marketing Platform データベース情報チェックリスト』を印刷して完成させます。この後、インストール・プロセスのステップでこの情報が必要になります。

ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する

Marketing Platform で必要な JDBC 接続用の正しい JAR ファイルを入手する必要があります。また、Marketing Platform の配置場所となる予定の Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに、このファイルの場所を追加する必要があります。

1. 「推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件」資料の説明に従って、IBM EMM でサポートされる最新のベンダー提供タイプ 4 JDBC ドライバーを入手します。
 - Marketing Platform の配置場所となるマシンにドライバーが存在しない場合は、それを入手して、Marketing Platform を配置する予定のマシン上で解凍します。スペースを含まないパスにドライバーを解凍してください。
 - データ・ソース・クライアントのインストール場所であるマシンからドライバーを入手する場合、IBM でサポートされる最新バージョンであることを確認してください。
2. Marketing Platform の配置場所となる予定の Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに、ファイル名を含むドライバーの絶対パスを次のように含めます。
 - サポートされるすべてのバージョンの WebLogic で、環境変数が構成されている `WebLogic_domain_directory/bin` ディレクトリー内の `setDomainEnv` スクリプトのクラスパスを設定します。正しいドライバーを Web アプリケーション・サーバーで確実に使用するためには、ドライバー項目を `CLASSPATH` 値リストの最初の項目 (既存のすべての値より前) にする必要があります。以下に例を示します。

UNIX

```
CLASSPATH="/home/oracle/product/10.2.0/jdbc/lib/ojdbc14.jar:
${PRE_CLASSPATH}${CLASSPATHSEP}${WEBLOGIC_CLASSPATH}
${CLASSPATHSEP}${POST_CLASSPATH}${CLASSPATHSEP}${WLP_POST_CLASSPATH}"
export CLASSPATH
```

Windows

```
set CLASSPATH=c:\oracle\jdbc\lib\ojdbc14.jar;%PRE_CLASSPATH%;
%WEBLOGIC_CLASSPATH%;%POST_CLASSPATH%;%WLP_POST_CLASSPATH%
```

- サポートされるすべてのバージョンの WebSphere の場合、クラスパスは、次のステップで Marketing Platform の JDBC プロバイダーをセットアップするときに設定します。
3. Marketing Platform データベース情報チェックリストでこのデータベース・ドライバー・クラスパスを書き留めておきます。インストーラーの実行時にこれを入力する必要があります。

4. 変更内容を有効にするために、Web アプリケーション・サーバーを再始動します。

始動時にコンソール・ログをモニターして、データベース・ドライバーのパスがクラスパスに含まれていることを確認してください。

ステップ: Web アプリケーション・サーバーでの JDBC 接続の作成

Marketing Platform の Web アプリケーションは、JDBC 接続を使ってシステム・テーブル・データベースと通信する必要があります。Marketing Platform の配置場所となる予定の Web アプリケーション・サーバーで、この JDBC 接続を作成する必要があります。

WebSphere では、このプロセスの際に、ご使用のデータベース・ドライバーのクラスパスを設定してください。

重要: JNDI 名として UnicaPlatformDS を使用する必要があります。これは必須であり、9 ページの『Marketing Platform データベース情報チェックリスト』に記載されています。

注: データベース・ログイン・ユーザーのデフォルト・スキーマとは異なるスキーマで Marketing Platform システム・テーブルが作成されている場合、システム・テーブルへのアクセスに使われる JDBC 接続で、その非デフォルト・スキーマ名を指定する必要があります。

JDBC 接続の作成に関する情報

JDBC 接続を作成するとき、入力する必要のあるいくつかの値を判別するうえでこのセクションが役立ちます。

注: データベースに対してデフォルトのポート設定を使用していない場合は、必ず、正しい値に変更してください。

このセクションの情報では、Web アプリケーション・サーバーが必要とするすべての情報を取り上げてはいません。このセクションで説明が明示されていない場合、デフォルト値を受け入れることができます。より広範囲のヘルプが必要な場合は、アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

WebLogic

アプリケーション・サーバーが WebLogic である場合は、これらの値を使用します。

SQLServer

- データベース・ドライバー: Microsoft MS SQL Server Driver (タイプ 4) バージョン: 2008、2008R2
- デフォルト・ポート: 1433
- ドライバー・クラス: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
- ドライバー URL: jdbc:sqlserver://<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>;databaseName=<データベース名>

- プロパティ: `user=<データベース・ユーザー名>` を追加

Oracle 11 および 11g

- ドライバー: その他
- デフォルト・ポート: 1521
- ドライバー・クラス: `oracle.jdbc.OracleDriver`
- ドライバー URL: `jdbc:oracle:thin:@<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>:<データベース・サービス名>`

示されている形式でドライバーの URL を入力してください。IBM EMM アプリケーションでは、JDBC 接続について Oracle の RAC (Real Application Cluster) 形式を使用できません。

- プロパティ: `user=<データベース・ユーザー名>` を追加

DB2

- ドライバー: その他
- デフォルト・ポート: 50000
- ドライバー・クラス: `com.ibm.db2.jcc.DB2Driver`
- ドライバー URL: `jdbc:db2://<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>/<データベース名>`
- プロパティ: `user=<データベース・ユーザー名>` を追加

WebSphere

アプリケーション・サーバーが WebSphere である場合は、これらの値を使用します。

SQLServer

- ドライバー: 該当なし
- デフォルト・ポート: 1433
- ドライバー・クラス:
`com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnectionPoolDataSource`
- ドライバー URL: 該当なし

「データベース・タイプ」フィールドで「ユーザー定義」を選択します。

JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースを作成した後、データ・ソースのカスタム・プロパティに移動して、以下のようにプロパティを追加/変更します。

- `serverName=<SQL サーバー名>`
- `portNumber =<SQL サーバー・ポート番号>`
- `databaseName=<データベース名>`
- `enable2Phase = false`

Oracle 11 および 11g

- ドライバー: Oracle JDBC Driver
- デフォルト・ポート: 1521

- ドライバー・クラス: `oracle.jdbc.OracleDriver`
- ドライバー URL: `jdbc:oracle:thin:@<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>:<データベース・サービス名>`

示されている形式でドライバーの URL を入力してください。IBM EMM アプリケーションでは、JDBC 接続について Oracle の RAC (Real Application Cluster) 形式を使用できません。

DB2

- ドライバー: DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー
- デフォルト・ポート: 50000
- ドライバー・クラス: `com.ibm.db2.jcc.DB2Driver`
- ドライバー URL: `jdbc:db2://<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>/<データベース名>`

Marketing Platform データベース情報チェックリスト

データ・ソース・タイプ	
データ・ソース名	
データ・ソースのホスト名	
データ・ソースのポート	
データ・ソース・アカウント・ユーザー名	
データ・ソース・アカウント・パスワード	
JNDI 名	UnicaPlatformDS
JDBC ドライバー・クラス	
JDBC 接続 URL	
システム上の JDBC ドライバー・クラスパス	

第 3 章 IBM Marketing Platform のインストール

IBM から DVD を入手するか、ソフトウェアをダウンロードします。

重要: すべてのインストール・ファイルを同じディレクトリに入れてください。
これはインストールのための要件です。

Marketing Platform をインストールするには、以下のものがが必要です。

- IBM マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー

UNIX タイプのシステムにおける権限の設定

UNIX タイプのシステムでは、インストール・ファイルに完全な実行権限 (rwxr-xr-x) があることを確認してください。

適切なインストーラー・ファイルを選ぶ

IBM EMM インストール・ファイルは、製品のバージョンおよび対象とするオペレーティング・システムに基づいて名前が付けられています。ただし、コンソール・モードで実行するための UNIX インストーラーは、オペレーティング・システム固有ではありません。UNIX の場合は、インストール・モードが X Window システムかコンソールかによって、異なるインストーラーが使用されます。

実際のインストール環境に基づいてどのインストーラーを選ぶことができるか、以下に例を示します。

GUI モードまたはコンソール・モードのどちらかを使用して Windows にインストールする場合 — *Product_N.N.N.N_win.exe* は、バージョン N.N.N.N で、Windows オペレーティング・システムへのインストール用です。

Solaris で X-windows モードを使ってインストールする予定の場合 — *Product_N.N.N.N_solaris.bin* (バージョン N.N.N.N、Solaris オペレーティング・システムでのインストール用)。

コンソール・モードを使用して UNIX タイプのオペレーティング・システムにインストールする場合 — *Product_N.N.N.N_sh* は、バージョン N.N.N.N で、サポートされるすべての UNIX タイプのオペレーティング・システムへのインストール用です。

IBM EMM インストーラーが機能する方法

IBM EMM インストーラーの基本機能を十分に理解していない場合は、このセクションをお読みください。

インストーラー・ファイルに関する単一ディレクトリーの要件

IBM EMM エンタープライズ製品をインストールするときには、いくつかのインストーラーを組み合わせで使用します。

- マスター・インストーラー (ファイル名に `IBM_EMM_Installer` が含まれます)
- 製品固有のインストーラー (その製品の名前がすべてのファイル名に含まれます)

IBM EMM 製品をインストールするには、マスター・インストーラーとすべての製品インストーラーを同じディレクトリーに入れる必要があります。マスター・インストーラーを実行すると、ディレクトリー内にある製品インストール・ファイルが検出されます。その後、インストール対象となる製品を選択することができます。

1 つの製品インストーラーの複数バージョンがマスター・インストーラーと同じディレクトリーに存在する場合、マスター・インストーラーは常に製品の最新バージョンをインストール・ウィザードの「IBM EMM 製品」画面に表示します。

パッチのインストール

IBM EMM 製品の新規インストールを実行した直後にパッチをインストールするよう計画することもできます。その場合、基本バージョンおよびマスター・インストーラーが含まれるディレクトリーにパッチ・インストーラーを入れてください。インストーラーを実行するとき、基本バージョンとパッチの両方を選択できます。これにより、インストーラーは正しい順序で両方をインストールします。

JAVA_HOME 環境変数の確認

IBM EMM 製品をインストールするマシンで `JAVA_HOME` 環境変数が定義されている場合、それが `Sun JRE バージョン 1.6` を指し示していることを確認してください。

この環境変数は IBM EMM 製品のインストールで必須ではありませんが、これが存在する場合は、`Sun JRE バージョン 1.6` を指す必要があります。

`JAVA_HOME` 環境変数が存在し、間違った `JRE` を指し示している場合には、IBM EMM インストーラーを実行する前に `JAVA_HOME` 変数を設定解除する必要があります。これは、以下のように行えます。

- Windows: コマンド・ウィンドウで、

`set JAVA_HOME=` と入力し、右辺を空のまま *Return* キーを押します。

- UNIX タイプのシステム: 端末で、

`export JAVA_HOME=` と入力し、右辺を空のまま *Return* キーを押します。

この環境変数が設定解除されると、IBM EMM インストーラーは、インストーラーと共にバンドルされた `JRE` を使用します。

インストールが完了した後に環境変数を再設定することができます。

製品のインストール・ディレクトリーの選択

ネットワーク・アクセス可能な任意のシステム上の任意のディレクトリーにインストールすることができます。インストール・ディレクトリーを指定するには、パスを入力するか、参照してその場所を選択することができます。

パスの前にピリオドを入力することにより、インストーラーを実行しているディレクトリーからの相対パスを指定できます。

ユーザーが指定したディレクトリーが存在しない場合、インストーラーは、ユーザーのログインに適切な権限があることを想定して、そのディレクトリーを作成します。

IBM EMM インストール済み環境のデフォルトの最上位ディレクトリーは、/IBM/EMM (UNIX) または C:\IBM\EMM (Windows) です。製品インストーラーは、EMM ディレクトリーの下の個々のサブディレクトリーに製品ファイルをインストールします。

インストール・タイプ

IBM EMM インストーラーは、以下の種類のインストールを実行します。

- **新規インストール:** インストーラーの実行時に、IBM EMM 製品がまだ一度もインストールされていないディレクトリーを選択した場合、インストーラーは自動的に新規インストールを実行します。
- **アップグレード・インストール:** インストーラーの実行時に、以前のバージョンの IBM EMM 製品がインストールされているディレクトリーを選択した場合、インストーラーは自動的にアップグレード・インストールを実行します。インストーラーによってデータベースが自動更新される製品の場合、アップグレード・インストールでは新しいテーブルが追加されますが、既存のテーブルのデータが上書きされることはありません。

インストーラーによってデータベースが自動更新される製品の場合、データベース内にテーブルが既に存在するなら、インストーラーはそれを作成しないため、アップグレード中にエラーが発生することがあります。これらのエラーは、無視しても安全です。詳しくは、アップグレードに関する章を参照してください。

- **再インストール:** インストーラーの実行時に、同じバージョンの IBM EMM 製品がインストールされているディレクトリーを選択した場合、インストーラーは既存のインストールを上書きします。既存の任意のデータを保持するには、再インストールする前に、インストール・ディレクトリーとシステム・テーブル・データベースをバックアップしておきます。

通常、再インストールは推奨されません。

インストール・モード

IBM EMM インストーラーは、以下のモードで実行可能です。

- コンソール (コマンド・ライン) モード

コンソール・モードでは、オプションは番号付きリストで表示されます。該当するオプションを選択するには、番号を指定します。番号を入力せずに Enter を押

した場合、インストーラーはデフォルト・オプションを使用します。デフォルト・オプションは、以下のいずれかの記号によって表されます。

--> この記号が表示されている場合にオプションを選択するには、対象のオプションの番号を入力してから Enter を押します。

[X] この記号は、リストにあるオプションの 1 つ、複数、またはすべてを選択できることを示しています。[X] 記号が隣にあるオプションの番号を入力して Enter を押すと、そのオプションがクリア、つまり選択解除されます。現在選択されていない (つまり [] が横に示されている) オプションの番号を入力して、Enter を押すと、そのオプションが選択されます。

複数のオプションを選択解除または選択するには、番号をコンマ区切りリストの形式で入力します。

- Windows GUI または UNIX X-windows モード
- ユーザー対話を必要としない不在モード (またはサイレント・モード)

複数回にわたって IBM EMM 製品をインストールする場合には、不在モードを使用できます。詳しくは、『不在モードを使用した複数回にわたるインストール』を参照してください。

不在モードを使用した複数回にわたるインストール

IBM EMM 製品を複数回にわたってインストールする必要がある場合は、ユーザー入力を必要としない不在モードで IBM EMM インストーラーを実行することができます。

応答ファイルについて

不在モード (サイレント・モードともいう) では、コンソールまたは GUI モードを使った場合にユーザーがインストール・プロンプトで入力する情報を提供するためのファイルまたはファイル・セットが必要です。これらのファイルを応答ファイルといいます。

次のいずれかのオプションを使用して、応答ファイルを作成できます。

- サンプル応答ファイルをテンプレートとして使って、応答ファイルを直接作成できます。サンプル・ファイルは、ResponseFiles という名前の圧縮アーカイブに、製品インストーラーとともに組み込まれています。サンプル応答ファイルの名前は、次のとおりです。
 - IBM EMM マスター・インストーラー - `installer.properties`
 - 製品インストーラー - `installer_` の後に製品名のイニシャルとバージョン番号を続けた名前。例えば、Campaign インストーラーの応答ファイルの名前は `installer_ucN.N.N.N.properties` です。
 - 製品のレポート・パック・インストーラー - `installer_` の後にレポート・パッケのイニシャル、製品名、およびバージョン番号を続けた名前。例えば、Campaign のレポート・パッケのインストーラーの応答ファイルの名前は `installer_urpcN.N.N.N.properties` です。

サンプル・ファイルを必要に応じて編集し、インストーラーと同じディレクトリに配置します。

- 別の方法として、不在モードの実行をセットアップする前に、Windows GUI か、UNIX の X-windows モードまたはコンソール・モードでインストーラーを実行して、応答ファイルの作成を選択することもできます。

IBM EMM マスター・インストーラーによって 1 つのファイルが作成され、さらに、インストール対象の IBM EMM 製品ごとに 1 つ以上のファイルが作成されます。

インストーラーの実行中に作成される応答ファイルの名前には、`installer_product version.properties` のように `.properties` という拡張子が付けられます。また、IBM EMM インストーラー自体のためのファイルは `installer.properties` という名前です。インストーラーは、ユーザーが指定したディレクトリーの中にこれらのファイルを作成します。

重要: セキュリティー上の理由で、インストーラーはデータベース・パスワードを応答ファイルに記録しません。不在モード用に応答ファイルを作成した場合、それぞれの応答ファイルを手動で編集してデータベース・パスワードを入力する必要があります。それぞれの応答ファイルを開いて `PASSWORD` を検索し、編集すべき場所を見つけます。

インストーラーが応答ファイルを検索する場所

不在モードで実行されるとき、インストーラーは次のようにして応答ファイルを探します。

- 最初に、インストーラーはインストール・ディレクトリーを検索します。
- 次に、インストーラーは、インストールを実行しているユーザーのホーム・ディレクトリーを検索します。

すべての応答ファイルは、同じディレクトリーの中に存在する必要があります。コマンド・ラインで引数を追加することにより、応答ファイルの読み取り場所となるパスを変更できます。以下に例を示します。

```
-DUNICA_REPLAY_READ_DIR="myDirPath" -f myDirPath/installer.properties
```

アンインストールする際の不在モードの影響

不在モードを使ってインストールされた製品をアンインストールする場合、不在モードでアンインストールが実行されます (ユーザー対話を求めるダイアログは提示されません)。

不在モードとアップグレード

アップグレードの際、応答ファイルが作成済みの場合に不在モードで実行すると、既に設定されたインストール・ディレクトリーがインストーラーによって使われます。応答ファイルが存在しない場合に不在モードを使ってアップグレードするためには、最初のインストールでインストーラーを手動で実行することによって応答ファイルを作成し、インストール・ウィザードで現在のインストール・ディレクトリーを必ず選択してください。

システム・テーブルの自動作成と手動作成

Marketing Platform インストーラーでは、データベース内にシステム・テーブルを自動的に作成するかどうかを選択できます。

インストーラーにシステム・テーブルを作成させることを選択した場合、以前のステップで作成した Marketing Platform データベースにインストーラーから接続できるようにするための情報を提供する必要があります。Marketing Platform の場合、これは、(18 ページの『ステップ: 必要な情報の入手』で説明されているように) 製品の登録用に IBM EMM マスター・インストーラーで提供する情報と同じです。

手動でシステム・テーブルを作成することを選択した場合、データベース・クライアントを使用して、Marketing Platform インストール済み環境に備わっている SQL スクリプトを実行する必要があります。手動でのテーブル作成について、詳しくは、21 ページの『ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる』を参照してください。

IBM サイト ID

IBM サイト ID を入力するようインストーラーによって求められる場合があります。お客様の IBM サイト ID は、IBM ウェルカム・レター、技術サポート・ウェルカム・レター、ライセンス証書レター、またはソフトウェア購入時にお届けするその他の通知に記載されています。

お客様による製品の使用状況をより良く把握し、カスタマー・サポートを改善する目的で、IBM はソフトウェアによって提供されるデータを使用することがあります。収集されるデータには、個人を特定する情報はまったく含まれません。

このような情報が収集されることをご希望されない場合は、Marketing Platform のインストール後に、管理特権を持つユーザーとして Marketing Platform にログインします。「設定」>「構成」ページにナビゲートし、「Platform」カテゴリーの下で「ページのタグ付けを無効にする」プロパティを **True** に設定してください。

IBM EMM インストーラーの終了コード

IBM EMM スイート・インストーラーを Windows または Linux で実行するとき、インストールの成功またはインストールにおけるエラーを示す標準的な終了コードが生成されます。

このセクションでは、IBM EMM インストーラーによって生成される標準的な終了コードについて説明します。

コードのリストでは最初に Windows のコードが示された後、Linux での同等のコードが括弧で示されます。

0 または 1 以外の値が示されている場合、以下のいずれかの理由でインストールが失敗したことを意味します。

コード	説明
0 (0)	成功: インストールは警告やエラーなく、正常に終了しました。

コード	説明
1 (1)	インストールは正常に終了しましたが、インストール・シーケンスの 1 つ以上のアクションにより、警告、または致命的ではないエラーが発生しました。
-1 (255)	ユーザーによってキャンセルされました。
1000 (232)	インストールに、無効なコマンド・ライン・オプションが含まれています。
1001 (233)	インストール・シーケンスの 1 つ以上のアクションにより、リカバリ不能エラーが発生しました。
2000 (208)	未処理エラー
2001 (209)	インストールの許可検査が失敗しました。期限切れのバージョンを示している可能性があります。
2002 (210)	インストールのルール検査が失敗しました。インストーラー自身に設定されているルールが失敗しました。
2003 (211)	サイレント・モードでの未解決の依存関係により、インストーラーが終了しました。
2004 (212)	インストール操作の実行中に十分なディスク・スペースが検出されなかったため、インストールが失敗しました。
2005 (213)	Windows 64 ビット・システムでのインストールの試行中にインストールが失敗しましたが、インストールには Windows 64 ビット・システムのサポートが含まれていませんでした。
2006 (214)	このインストーラーでサポートされない UI モードで起動されたため、インストールが失敗しました。
3000 (184)	ランチャー固有の未処理エラー。
3001 (185)	<code>lax.main.class</code> プロパティ固有のエラーが原因で、インストールが失敗しました。
3002 (186)	<code>lax.main.method</code> プロパティ固有のエラーが原因で、インストールが失敗しました。
3003 (187)	インストールでは、 <code>lax.main.method</code> プロパティで指定されたメソッドにアクセスできませんでした。
3004 (188)	<code>lax.main.method</code> プロパティによって生じた例外エラーが原因で、インストールが失敗しました。
3005 (189)	<code>lax.application.name</code> プロパティに値が割り当てられていなかったため、インストールが失敗しました。
3006 (190)	インストールでは、 <code>lax.nl.java.launcher.main.class</code> プロパティに割り当てられている値にアクセスできませんでした。
3007 (191)	<code>lax.nl.java.launcher.main.class</code> プロパティ固有のエラーが原因で、インストールが失敗しました。
3008 (192)	<code>lax.nl.java.launcher.main.method</code> プロパティ固有のエラーが原因で、インストールが失敗しました。
3009 (193)	インストールでは、 <code>lax.nl.launcher.java.main.method</code> プロパティで指定されたメソッドにアクセスできませんでした。
4000 (160)	Java 実行可能ファイルを、 <code>java.home</code> システム・プロパティで指定されたディレクトリで検出できませんでした。
4001 (161)	インストーラー <code>jar</code> のパスが間違っているため、リランチャーが正しく起動されませんでした。

コード	説明
5000 (136)	インスタンスが正しくアンインストールされなかったため、またはレジストリーが破損していたため、既存のインスタンスの変更が失敗しました。

Marketing Platform コンポーネントをインストールする場所

Marketing Platform アプリケーションには、IBM 共通ナビゲーション、レポート、ユーザー管理、セキュリティ、スケジューリング、および構成管理の各機能が含まれています。以下のガイドラインに従ってください。

- それぞれの IBM EMM 環境で、Marketing Platform を一度インストールして配置する必要があります。
- 追加のマシン上で Marketing Platform ユーティリティを使用するには、ユーティリティと Web アプリケーションの両方をインストールする必要があります。ユーティリティは Web アプリケーション内の jar ファイルを使用するため、このようにする必要があります。ただし、この目的で Marketing Platform をインストールするとき、Marketing Platform を再び配置する必要はなく、追加の Marketing Platform システム・テーブルを作成する必要もありません。

以下の表は、Marketing Platform のインストール時に選択できるコンポーネントについて説明しています。

コンポーネント	説明
Marketing Platform ユーティリティ	これらのコマンド・ライン・ツールを使用すると、コマンド・ラインから Marketing Platform システム・テーブル・データベースを操作して、構成のインポート/エクスポート、パーティションとデータ・フィルターの作成、platform_admin ユーザーの復元を行うことができます。 Marketing Platform ユーティリティを使用可能にするすべてのマシン上にこれをインストールしてください。
Marketing Platform Web アプリケーション	この Web アプリケーションは、IBM EMM 用の一般的なユーザー・インターフェース、セキュリティ、および構成管理を提供します。 Marketing Platform の配置場所となる予定のマシンにこれをインストールしてください。また、Marketing Platform ユーティリティを使用可能にする追加のマシンを構成する場合にも、(Web アプリケーションに含まれる JAR ファイルがユーティリティによって使用されるため) Web アプリケーションをインストールする必要があります。このような追加のマシン上には配置しないでください。
Reports for IBM Cognos® BI	IBM Cognos 用のレポート統合コンポーネントです。Cognos システム上にのみ、このコンポーネントをインストールしてください。

ステップ: 必要な情報の入手

インストーラーは、Marketing Platform システム・テーブル・データベースおよび Web アプリケーション・サーバーについての情報をいくつか入力するよう求めます。インストールを始める前に、この情報を収集してください。

Marketing Platform データベースの接続情報の収集

すべての製品のインストール・ウィザードでは、メニュー項目、セキュリティ情報、および構成プロパティを登録するために Marketing Platform システム・テーブル・データベースと通信する必要があります。新しい場所でインストーラーを実行するたびに、Marketing Platform システム・テーブル・データベースに関する以下のデータベース接続情報を入力する必要があります。

- データベース・タイプ。
- データベース・ホスト名。
- データベース・ポート。
- データベースの名前またはスキーマ ID。
- データベース・アカウントのユーザー名とパスワード。

データベースまたはスキーマを作成して Marketing Platform データベース情報チェックリストに記入したときに、これらの情報を入手しています。

インストールを実行するとき、マスター・インストーラーはこの接続情報をテストして検証します。

Web アプリケーション・サーバーでの配置についての情報を入手する

予定している Marketing Platform の配置について、以下の情報を入手してください。

- プロトコル: HTTP または HTTPS (Web アプリケーション・サーバーで SSL が実装されている場合)。
- ホスト: Marketing Platform の配置先となるマシンの名前。
- ポート: Web アプリケーション・サーバーが listen するポート。
- ドメイン・ネーム: IBM 製品がインストールされる各マシンの会社のドメイン。例えば mycompany.com。すべての IBM 製品は同じ会社のドメインにインストールされる必要があります、ドメイン・ネームをすべて小文字で入力する必要があります。

ドメイン・ネーム項目で不一致がある場合、Marketing Operations の機能を使用したり、製品間でナビゲートしたりするときに問題が生じる可能性があります。製品の配置後にドメイン・ネームを変更できます。そうするには、ログインして、「設定」>「構成」ページの製品ナビゲーション・カテゴリで該当する構成プロパティの値を変更します。

Marketing Platform ユーティリティーを有効化するために必要な情報の入手

Marketing Platform ユーティリティーの使用を予定している場合、Marketing Platform のインストールを始める前に、以下の JDBC 接続情報を入手してください。

- JRE のパス。デフォルト値は、インストーラーによって IBM インストール・ディレクトリーの下に配置される JRE バージョン 1.6 のパスです。

このデフォルトを受け入れることも、別のパスを指定することもできます。別のパスを指定する場合は Sun JRE バージョン 1.6 を指す必要があります。

- JDBC ドライバー・クラス。これは、インストーラーで指定したデータベース・タイプに基づき、インストーラーによって自動的に提供されます。
- JDBC 接続 URL。基本的な構文がインストーラーによって提供されますが、ホスト名、データベース名、ポートを入力する必要があります。
- システム上の JDBC ドライバー・クラスパス。

上記リストの最後の 3 項目については、データベースまたはスキーマを作成して Marketing Platform データベース情報チェックリストに記入したときに、これらの情報を入手しています。

ステップ: IBM インストーラーの実行

IBM マスター・インストーラーを実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認してください。

- インストールする予定のソフトウェア製品を入手して、すべてのインストーラーを同じディレクトリの中に入れます。
- 18 ページの『ステップ: 必要な情報の入手』で説明されている情報を収集して準備します。

インストール中にインストーラーによって Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる操作が企業のポリシーで許可されない場合は、21 ページの『ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる』を参照してください。

注: WebLogic 9.2 上に Marketing Platform を配置する予定の場合、EAR ファイルに Marketing Platform を含めないでください。詳しくは、WebLogic のガイドライン (23 ページの『WebLogic 上に Marketing Platform を配置する際のガイドライン』) を参照してください。

インストーラーについての詳細情報や、ウィザードで情報を入力するときのヘルプが必要な場合は、この章の他のトピックを参照してください。

ここで説明されているように IBM マスター・インストーラーを実行して、ウィザードの指示に従います。

• GUI または X-windows モード

IBM_EMM_Installer ファイルを実行します。UNIX タイプのシステムでは、.bin ファイルを使用してください。

• Windows のコンソール・モード

コマンド・プロンプトを開き、IBM ソフトウェアが入っているディレクトリから IBM_EMM_Installer 実行可能ファイルを実行します。その際、-i console を指定します。例えば、

```
IBM_EMM_Installer_N.N.N.OS -i console
```

• UNIX タイプのシステムでのコンソール・モード

スイッチを指定せずに IBM_EMM_installer.sh ファイルを実行します。

- **不在モード**

コマンド・プロンプトを開き、IBM ソフトウェアが入っているディレクトリーから IBM_EMM_Installer 実行可能ファイルを実行します。その際、`-i silent` を指定します。UNIX タイプのシステムでは、`.bin` ファイルを使用してください。

例えば、インストーラーと同じディレクトリーに配置された応答ファイルを指定するには、次のようにします。

```
IBM_EMM_Installer_N.N.N.N_OS -i silent
```

別のディレクトリーにある応答ファイルを指定するには、`-f filepath/filename` を使用します。絶対パスを使用してください。以下に例を示します。

```
IBM_EMM_Installer_N.N.N.N_OS -i silent -f filepath/filename
```

不在モードの詳細情報については、14 ページの『不在モードを使用した複数回にわたるインストール』を参照してください。

インストールの要約を示すウィンドウを注意深く確認します。エラーが報告されている場合は、インストーラーのログ・ファイルを検査し、必要に応じて IBM 技術サポートに連絡してください。

ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる

インストール中に IBM インストーラーは Marketing Platform システム・テーブルを作成できますが、企業のポリシーでこれが許可されない場合は、手動でテーブルを作成してそれにデータを入れる必要があります。

1. 20 ページの『ステップ: IBM インストーラーの実行』の説明と同じようにして IBM インストーラーを実行します。ただし Marketing Platform インストーラーが起動されるときに以下のように選択する点が異なります。
 - 「**手動データベース・セットアップ**」を選択します。
 - 「**Platform の構成の実行**」チェック・ボックスを選択解除します。
2. インストーラーが完了した後、80 ページの『システム・テーブルの作成』の説明に従い、データベース・タイプに対応する以下の SQL スクリプトを Marketing Platform システム・テーブル・データベースに対して実行することで、手動でシステム・テーブルを作成します。

ここに示す順序でスクリプトを実行してください。

- `ManagerSchema_DBType.sql`

マルチバイト文字 (例えば中国語、日本語、韓国語) のサポートを計画している場合、データベースが DB2 であれば `ManagerSchema_DB2_unicode.sql` スクリプトを使用します。

- `ManagerSchema__DBType_CeateFKConstraints.sql`
- `active_portlets.sql`

- quartz__DBType.sql
3. IBM インストーラーを再び実行し、Marketing Platform インストーラーが起動されたときに以下を選択します。
 - 「手動データベース・セットアップ」を選択します。
 - 「**Platform** の構成の実行」チェック・ボックスを選択します。

これにより、システム・テーブルにデフォルト・データが追加されます。

第 4 章 IBM Marketing Platform の配置

Marketing Platform を Web アプリケーション・サーバーに配置するときには、このセクションで説明されているガイドラインに従う必要があります。

IBM インストーラーを実行したとき、Marketing Platform を EAR ファイルに含めたか、Marketing Platform の WAR ファイル (unica.war) を配置する選択をした可能性があります。他の製品を EAR ファイルの中を含めた場合、EAR ファイルに含まれる個々の製品のインストール・ガイドで詳しく説明される配置のガイドラインにすべて従う必要があります。

ここでは、読者が Web アプリケーション・サーバーの操作方法を知っていることを想定します。管理コンソールのナビゲーションなど、詳細については、Web アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

WebLogic 上に Marketing Platform を配置する際のガイドライン

Marketing Platform を WebLogic 上に配置する場合、このセクションのガイドラインに従ってください。

すべてのバージョンの WebLogic

サポートされるいずれかのバージョンの WebLogic に Marketing Platform 製品を配置する場合は、このセクションのガイドラインに従ってください。

1. IBM EMM 製品は、WebLogic によって使われる JVM をカスタマイズします。JVM 関連のエラーが発生する場合、IBM EMM 製品専用の WebLogic インスタンスを作成する必要があることがあります。
2. 始動スクリプト (startWebLogic.cmd) で JAVA_VENDOR 変数を調べることで、ご使用の WebLogic ドメインに関して選択された SDK が Sun SDK であることを確認します。これが JAVA_VENDOR=Sun に設定されている必要があります。JAVA_VENDOR=BEA に設定されている場合は、JRockit が選択されています。JRockit はサポートされません。選択した SDK に変更する方法については、BEA WebLogic の資料を参照してください。
3. Web アプリケーションとして Marketing Platform を配置します。
4. **JVM バージョン 1.6 以降を使用するよう WebLogic インスタンスが構成されている場合のみ**、タイム・ゾーン・データベースの問題を回避するために、以下を行います。
 - WebLogic を停止します。
 - 以下の Oracle Web サイトからタイム・ゾーン・アップデーター・ツールをダウンロードします。

<http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/tzupdater-readme-136440.html>

- タイム・ゾーン・アップデーター・ツールで示される手順に従って、JVM 内のタイム・ゾーン・データを更新します。

5. IIS プラグインを使用するよう WebLogic を構成する場合は、BEA WebLogic の資料を確認してください。

追加のガイドライン (WebLogic 11gR1 の場合のみ)

Marketing Platform を WebLogic 11gR1 上に配置する場合、このセクションのガイドラインに従ってください。

1. インストール済み環境で非 ASCII 文字をサポートする必要がある場合のみ (例えばポルトガル語や、マルチバイト文字を必要とするロケール)、WebLogic ドメイン・ディレクトリーの下の bin ディレクトリーにある setDomainEnv スクリプトを、次のように編集します。
 - 以下を JAVA_OPTIONS に追加します。

```
-Dfile.encoding=UTF-8
```

2. WebLogic コンソールで、ホーム・ページの「ドメイン」リンクをクリックして、Web アプリケーション・タブの「実際のパスのアーカイブを有効にする (Archived Real Path Enabled)」ボックスをチェックします。
3. WebLogic を再始動します。
4. EAR ファイルまたは WAR ファイル (unica.war) を配置して開始します。

すべてのバージョンの WebSphere に Marketing Platform を配置する際のガイドライン

Marketing Platform を IBM WebSphere 上に配置する場合、このセクションのガイドラインに従ってください。

1. WebSphere のバージョンが、「*IBM Enterprise* 製品の推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件」資料に記載されている要件 (必要なフィックスパックまたはアップグレードを含む) を満たしていることを確認します。
2. 次のようにして、サーバーでカスタム・プロパティを設定します。
 - 名前: com.ibm.ws.webcontainer.invokefilterscompatibility
 - 値: true

WebSphere でのカスタム・プロパティの設定については、

<http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21284395> の説明を参照してください。

3. IBM EAR ファイルまたは unica.war ファイルを、エンタープライズ・アプリケーションとして配置します。

下記のガイドラインに従います。以下で特に明記されていない限り、デフォルト設定を受け入れることができます。

次のようにして、JSP コンパイラーの JDK ソース・レベルを Java 16 に設定し、JSP ページをプリコンパイルしたことを確認します。

- WAR ファイルをブラウズして選択する形式で、「すべてのインストール・オプションとパラメーターを表示」を選択すると、「インストール・オプションの選択」ウィザードが実行されます。

- 「インストール・オプションの選択」ウィザードのステップ 1 で、「**JavaServer Pages** ファイルのプリコンパイル」を選択します。
- 「インストール・オプションの選択」ウィザードのステップ 3 で、次の手順を実行します。
 - 「インストール・オプションの選択」ウィザードのステップ 3 で、「**JDK ソース・レベル**」が 16 に設定されていることを確認します。 16 が選択不可の場合は、15 を選択します。

EAR を配置した場合は、それぞれの WAR ファイルについて「JDK ソース・レベル」を設定してください。

コンテキスト・ルートは /unica (すべて小文字) にする必要があります。

4. サーバーの「**Web コンテナー設定**」>「**Web コンテナー**」>「**セッション管理**」セクションで、Cookie を有効にします。
5. 配置するアプリケーションごとに異なるセッション Cookie 名を指定します。その際、次の手順のうち、実行している配置に該当する手順を使用してください。
 - 「セッション管理」の下にある「セッション管理のオーバーライド」チェック・ボックスを選択します。
 - IBM EMM 製品について別個の WAR ファイルを配置した場合は、WebSphere コンソールで、サーバーの「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」> [配置するアプリケーション] > 「セッション管理」> 「Cookie を使用可能にする」> 「Cookie 名」セクションで、固有のセッション Cookie 名を指定します。
 - 「セッション管理」の下にある「セッション管理のオーバーライド」チェック・ボックスを選択します。
 - IBM EMM 製品について EAR ファイルを配置した場合は、WebSphere コンソールで、サーバーの「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」> [配置するアプリケーション] > 「モジュール管理 (Module Management)」> [配置するモジュール] > 「セッション管理」> 「Cookies を使用可能にする」> 「Cookie 名」セクションで、固有のセッション Cookie 名を指定します。
6. インストール済み環境で非 ASCII 文字をサポートする必要がある場合のみ (例えばポルトガル語や、マルチバイト文字を必要とするロケール)、サーバー・レベルで以下の項目を「汎用 JVM 引数」に追加します。

`-Dfile.encoding=UTF-8`

`-Dclient.encoding.override=UTF-8`

ナビゲーションのヒント: 「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」>「Java およびプロセス管理」>「プロセス定義」>「Java 仮想マシン」>「汎用 JVM 引数」を選択します。詳しくは、WebSphere の資料を参照してください。

7. サーバーの「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」セクションで、配置した EAR ファイルまたは WAR ファイルを選択し、「クラス・ロードおよび更新の検出」を選択して、以下の一般プロパティを設定します。
 - WAR ファイルを配置する場合:
 - 「クラス・ローダーの順序」では、「最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)」を選択します。
 - 「WAR クラス・ローダー・ポリシー」では、「アプリケーションの単一クラス・ローダー」を選択します。
 - EAR ファイルを配置する場合:
 - 「クラス・ローダーの順序」では、「最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)」を選択します。
 - 「WAR クラス・ローダー・ポリシー」では、「アプリケーションの各 War ファイルのクラス・ローダー」を選択します。
8. 配置を開始します。
9. **JVM バージョン 1.6 以降を使用するよう WebSphere インスタンスが構成されている場合のみ**、タイム・ゾーン・データベースの問題を回避するために、以下を行います。
 - WebSphere を停止します。
 - IBM Time Zone Update Utility for Java (JTZU) を、以下の IBM Web サイトからダウンロードします。

<http://www.ibm.com/developerworks/java/jdk/dst/index.html>
 - IBM (JTZU) で示される手順に従って、JVM 内のタイム・ゾーン・データを更新します。
10. WebSphere を再始動します。

ステップ: Marketing Platform のインストールの検証

1. Internet Explorer を使って IBM EMM の URL にアクセスします。

インストール時にドメインを入力した場合、URL は次のとおりです。ここで *host* は、Marketing Platform がインストールされているマシン、*domain.com* はホスト・マシンがあるドメイン、*port* は Web アプリケーション・サーバーが listen するポート番号です。

`http://host.domain.com:port/unica`

2. デフォルトの管理者ログイン `asm_admin`、およびパスワード `password` を使ってログインします。

パスワードを変更するよう求められます。既存のパスワードを入力することもできますが、セキュリティのために新しいパスワードを選択してください。

デフォルトのホーム・ページはダッシュボードですが、後でこれを構成します。構成されるまでは、「ページが見つからない」というメッセージがダッシュボード・ページに表示されることがあります。

3. 「設定」メニューの下で「ユーザー」、「ユーザー・グループ」、「ユーザー権限」の各ページを調べて、「*Marketing Platform* 管理者ガイド」で説明されている構成済みユーザー、グループ、役割、および権限が存在することを確認します。
4. 新しいユーザーとグループを追加して、そのデータが *Marketing Platform* システム・テーブル・データベースに入力されたことを確認します。
5. 「設定」メニューの下で「構成」ページを調べて、*Marketing Platform* の構成プロパティが存在することを確認します。

さらに、追加の構成タスクがあります。ダッシュボードの構成、IBM アプリケーションへのユーザー・アクセスのセットアップ、LDAP または Web アクセス制御システムとの統合 (オプション) などです。「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド」の説明を参照してください。

第 5 章 配置後の IBM Marketing Platform の構成

Marketing Platform の基本インストールでは、以下の条件が当てはまる場合にのみ、追加の構成を実行する必要があります。

- IBM EMM レポート機能を使用している場合は、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照してください。
- 特定のパスワード・ポリシーを考慮している場合 (デフォルト・パスワード設定を変更する必要があるかどうか判断するには、『デフォルト・パスワード設定を変更するには』を参照してください)。

オプションで、構成ページにある追加的な Marketing Platform プロパティを使用すると、重要な機能を調整することができます。これらの機能について、および設定方法については、プロパティのコンテキスト・ヘルプまたは「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

デフォルト・パスワード設定を変更するには

IBM EMM の構成ページ (「IBM EMM」>「全般」>「パスワード設定」カテゴリ) でパスワード・ポリシーを設定します。

これらのパスワード・オプションは、(IBM EMM の中で作成された) 内部ユーザーのパスワードにのみ適用されます。外部システム (例えば Windows Active Directory、サポートされる LDAP ディレクトリー・サーバー、または Web アクセス制御サーバー) との同期を介してインポートされたユーザーには適用されません。例外はログイン失敗時に許容される最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed) プロパティで、このプロパティは内部ユーザーと外部ユーザーの両方に影響を及ぼします。またこのプロパティは、外部システムの同様の制約事項を無効にするわけではありません。

デフォルトの設定は次のとおりです。

- 許可されるログイン再試行の最大回数 - 3
- パスワード履歴の数 - 0
- 有効期間 (日数) - 30
- 空白のパスワードを許可 - True
- ユーザー名と同じパスワードを許可 - True
- 最小限必要な数字の数 - 0
- 最小限必要な英字の数 - 0
- 最小限必要なパスワードの長さ - 4

これらのプロパティの説明については、オンライン・ヘルプを参照してください。

第 6 章 IBM Marketing Platform のアップグレード

Marketing Platform をアップグレードする前に必ず『全 IBM EMM 製品に関するアップグレード前提条件』と 33 ページの『Marketing Platform のアップグレードのシナリオ』をお読みにになり、理解を深めてください。

全 IBM EMM 製品に関するアップグレード前提条件

IBM EMM 製品をアップグレードするには、『インストールの準備』の章の 3 ページの『前提条件』の下にリストされている前提条件をすべて満たしている必要があります。

それに加えて、このセクションでリストされる前提要件も満たしている必要があります。

以前のインストールによって生成された応答ファイルの削除

インストーラーを実行して 8.6.0 より前のバージョンからアップグレードする場合、以前のインストールによって生成された応答ファイルをすべて削除する必要があります。

インストーラーの動作と応答ファイルの形式に変更が加えられたため、古い応答ファイルには 8.6.0 以降のインストーラーとの互換性がありません。

古い応答ファイルを削除しないと、インストーラーを実行するときにインストーラー・フィールドに正しくないデータが事前に入力されていたり、一部のファイルがインストーラーによってインストールされなかったり、構成ステップがスキップされたりする可能性があります。

応答ファイルの名前は、`installer_<product><version>.properties` です。ただし、IBM インストーラー自体のためのファイルは例外で、`installer.properties` という名前です。インストーラーはこれらのファイルを、インストール中にユーザーが指定したディレクトリー内に作成します。デフォルトの場所は、ユーザーのホーム・ディレクトリーです。

ユーザー・アカウント要件 (UNIX のみ)

UNIX の場合、製品をインストールしたユーザー・アカウントと同じユーザー・アカウントでアップグレードを実行する必要があります。

32 ビットから 64 ビットへのバージョンアップ

32 ビットから 64 ビットに IBM EMM 製品をバージョンアップする場合、以下の条件が満たされていることを確認してください。

- 製品データ・ソースのデータベース・クライアント・ライブラリーも 64 ビットである
- すべての関連ライブラリー・パス (例えば、開始スクリプトまたは環境スクリプト) がデータベース・ドライバーの 64 ビット・バージョンを正しく参照する

知識要件

これ以降の説明は、アップグレードを実行するユーザーが以下の分野について理解していることを前提としています。

- IBM インストーラーの基本機能 (11 ページの『IBM EMM インストーラーが機能する方法』で説明されている)
- IBM EMM 製品の一般的な機能とコンポーネント (ファイル・システムの構造を含む)
- ソース製品バージョンおよび新規バージョンのインストールおよび構成プロセス
- ソース・システムとターゲット・システムの構成プロパティの保守
- レポートのインストールおよび構成プロセス (そのレポートを使用する場合)

Oracle または DB2 のみ: 自動コミット要件

Marketing Platform システム・テーブルが Oracle または DB2 にある場合、環境がオープンされる度に自動コミットが行われるように構成する必要があります。

Oracle または DB2 の資料の説明を参照してください。

ユーザー定義のグループ名および役割名の確認

ユーザーが作成したグループまたは役割のいずれかに、システム定義の役割と同じ名前が付けられている場合は、アップグレード前にそれらのグループまたは役割の名前を変更してください。ユーザーが作成したグループまたは役割のいずれかに、システム定義の役割と同じ名前が付けられていると、アップグレードの際に問題が起きることがあります。

例えば、ユーザーが作成したグループまたは役割の名前が「Admin」である場合、この名前は Campaign で使用されるシステム定義の役割の名前なので、変更する必要があります。

タイム・ゾーン・サポートに関するスケジュールのアップグレード

バージョン 8.5.0 では、Marketing Platform スケジューラーで、タスクに対して世界中の多数のタイム・ゾーンをどれでも選択できます。タスクを 8.5.0 より前のバージョンの Marketing Platform でスケジュールした場合、デフォルトのタイム・ゾーンに設定されます。これは、Marketing Platform がインストールされているサーバーのタイム・ゾーンです。

スケジューラーでタイム・ゾーン・サポートを利用するには、必要に応じてスケジュール済みのタスクを編集し、新規タイム・ゾーンを選択する必要があります。スケジューラーの使用について詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

IBM Digital Analytics ダッシュボード・ポートレットのアップグレード

カスタム IBM Digital Analytics ポートレットを組み込んだダッシュボードがある場合は、アップグレードの完了後にそれらのポートレットを再作成する必要があります。

IBM フレーム・セットを再ブランド化した場合

「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」の説明に従って IBM フレーム・セットを再ブランド化した場合、アップグレードを開始する前に、変更したファイルをバックアップし、アップグレード・インストール完了後かつ新規バージョンの配置前にリストアする必要があります。

通常、これらのファイルは、`corporatetheme.css` ファイルおよびブランド・イメージです。このファイルおよびイメージは、`css¥theme` ディレクトリーの下の `unica.war` ファイル内にあります。

したがって、以下を行う必要があります。

1. アップグレード手順を開始する前に `unica.war` ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
2. `unica.war` ファイルを解凍し、`corporatetheme.css` ファイルおよびブランド・イメージのコピーを取り分けます。
3. 本章の説明に従ってアップグレードを開始します。ただし、配置は行いません。
4. 新規 `unica.war` ファイルを解凍し、既存のイメージおよび `corporatetheme.css` ファイルをバックアップされているバージョンで上書きします。
5. 新規 `unica.war` ファイルを再び `war` で圧縮し、配置します。

再ブランド化の追加の詳細については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Marketing Platform のアップグレードのシナリオ

Marketing Platform をアップグレードするには、以下のガイドラインに従ってください。

Marketing Platform のソース・バージョン	アップグレード・パス
7.x	これらのバージョンからの直接のアップグレードはサポートされていません。次の手順に従ってください。 • まず、任意の 7.x バージョンからバージョン 8.6.0 にアップグレードします。バージョン 8.6.0 へのこのアップグレードを実行するには、ソフトウェアを入手し、そのバージョンのインストール・ガイドにある指示に従ってください。 • 次に、以下のトピックで説明されている手順でアップグレードを実行します。 – 35 ページの『自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』 – 55 ページの『手動マイグレーションでバージョン 8.6.x からアップグレードするには』

Marketing Platform のソース・バージョン	アップグレード・パス
8.0.x または 8.1.x、LDAP サーバーと統合されているもの	1. 「AM グループ・マップの LDAP 参照 (LDAP reference to AM group map)」プロパティでマップされていない LDAP グループを「AM ユーザー作成用の LDAP 参照 (LDAP references for AM user creation)」プロパティでマップした場合、アップグレードに進む前に Marketing Platform の現行バージョンで以下を行う必要があります。 「AM グループ・マップの LDAP 参照 (LDAP reference to AM group map)」プロパティでマップされていない「AM ユーザー作成用の LDAP 参照 (LDAP references for AM user creation)」プロパティ内のグループを識別します。 - 識別した LDAP グループを該当する Marketing Platform グループにマップします。LDAP 同期を実行した後、これらのユーザーを追加の Marketing Platform グループにマップし、必要に応じてそのアプリケーション・アクセスを制御することができます。詳しくは、「<i>IBM Marketing Platform 管理者ガイド</i>」を参照してください。 直前のステップを実行することで、希望のユーザーすべてが Marketing Platform で作成されます。 2. 次に、以下のトピックで説明されている手順でアップグレードを実行します。 35 ページの『自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』 36 ページの『手動マイグレーションでバージョン 8.0.x、8.1.x、8.2.x (8.2.0.7 より前) からアップグレードするには』
8.0.x (LDAP サーバーと統合されていないもの) 8.1.x (LDAP サーバーと統合されていないもの) 8.2.x (バージョン 8.2.0.7 より前)	以下のトピックのいずれかにある説明に従って、Marketing Platform のインストール済み環境をアップグレードします。 35 ページの『自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』 36 ページの『手動マイグレーションでバージョン 8.0.x、8.1.x、8.2.x (8.2.0.7 より前) からアップグレードするには』
8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョン	以下のトピックのいずれかにある説明に従って、Marketing Platform のインストール済み環境をアップグレードします。 35 ページの『自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』 43 ページの『手動マイグレーションでバージョン 8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョンからアップグレードするには』
8.5.x	以下のトピックのいずれかにある説明に従って、Marketing Platform のインストール済み環境をアップグレードします。 35 ページの『自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』 49 ページの『手動マイグレーションでバージョン 8.5.x からアップグレードするには』
8.6.x	以下のトピックのいずれかにある説明に従って、Marketing Platform のインストール済み環境をアップグレードします。 35 ページの『自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』 55 ページの『手動マイグレーションでバージョン 8.6.x からアップグレードするには』>

自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法

バージョン 8.x からのアップグレードは、インプレース・アップグレードです。現行の Marketing Platform がインストールされているディレクトリーにインストールを行います。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM EMM マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー

ベスト・プラクティスは、以下のとおりです。

- 以前のバージョンの製品のインストーラーを当初置いたのと同じディレクトリーにインストーラーを置きます。
 - 以前のバージョンの IBM EMM 製品インストーラーがあればすべてディレクトリーから削除し、マスター・インストーラーが以前のバージョンのインストールを試行しないようにします。
1. Marketing Platform システム・テーブル・データベースのバックアップ・コピーを作成します。

重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

2. Marketing Platform 配置を配置解除します。
3. IBM EMM マスター・インストーラーを実行します。

IBM EMM マスター・インストーラーが開始します。インストーラーの実行について詳しくは、20 ページの『ステップ: IBM インストーラーの実行』を参照してください。

- インストール・ディレクトリーを選択するように求めるプロンプトが IBM EMM マスター・インストーラーから出されたら、ルート・インストール・ディレクトリーを選択します (このルート・ディレクトリーの下にある Marketing Platform インストール・ディレクトリーではありません)。
- Marketing Platform データベース接続情報の入力を求めるプロンプトが IBM EMM マスター・インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform システム・テーブルに関する情報を入力します。

IBM EMM マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

4. Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
 - インストール・ディレクトリーを求めるプロンプトが Marketing Platform インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform インストールのディレクトリー (通常 Platform という名前) を選択します。
 - 「自動データベース・セットアップ」を選択します。
 - インストール・ウィザードの残りのすべてのステップに従い、要求されるすべての情報を入力します。
5. 23 ページの『第 4 章 IBM Marketing Platform の配置』のガイドラインに従って、インストールを配置します。

6. インストールの要約を示すウィンドウを注意深く確認します。エラーが報告される場合、インストーラー・ログ・ファイルを調べ、必要に応じて IBM EMM テクニカル・サポートに連絡してください。

手動マイグレーションでバージョン 8.0.x、8.1.x、8.2.x (8.2.0.7 より前) からアップグレードするには

Marketing Platform アップグレード・インストーラーは、アップグレードに必要なすべてのデータ・マイグレーションを自動的に実行できますが、組織のポリシーでそれが許可されない場合には、この手順を実行して手動でアップグレードする必要があります。

この手順は、Marketing Platform バージョン 8.0.x、8.1.x、および 8.2.x (8.2.0.7 より前) からのアップグレードにのみ当てはまります。他のバージョンからのアップグレードに関する情報は、33 ページの『Marketing Platform のアップグレードのシナリオ』を参照してください。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー

また、Marketing Platform 8.x のインストール済み環境が正常に機能すること、およびコマンド・ライン・ツールを実行することも確認してください。この手順では、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリーにある 3 つの Marketing Platform ユーティリティーを使用する必要があります。これらのユーティリティーの使用に関する詳しい情報 (共通タスクのコマンド例を含む) は、以下から入手できます。

- 73 ページの『populateDb ユーティリティー』
- 64 ページの『configTool ユーティリティー』
- 68 ページの『alertConfigTool ユーティリティー』

1. IBM EMM にログインして、「設定」>「構成」ページにナビゲートし、「LDAP BaseDN 定期検索が有効」という名前のプロパティー (「Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期」カテゴリー) が存在するかどうかを判別します。

この情報は後のステップで使用します。

2. Marketing Platform システム・テーブル・データベースのバックアップを作成します。

重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

3. 現行バージョンを配置解除します。
4. IBM マスター・インストーラーを実行します。

IBM マスター・インストーラーが開始します。IBM マスター・インストーラーで、以下のガイドラインに従います。

- Marketing Platform データベース接続情報の入力を求めるプロンプトが IBM マスター・インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform システム・テーブルに関する情報を入力します。
- インストール・ディレクトリーを選択するように求めるプロンプトが IBM マスター・インストーラーから出されたら、ルート・インストール・ディレクトリーを選択します (このルート・ディレクトリーの下にある Marketing Platform インストール・ディレクトリーではありません)。

IBM マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

- Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
 - インストール・ディレクトリーを求めるプロンプトが Marketing Platform インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform インストールのディレクトリー (通常 Platform という名前) を選択します。
 - インストーラーに前のインストールをバックアップさせます。
 - 「**手動データベース・セットアップ**」を選択します。
 - 「**Platform の構成の実行**」チェック・ボックスを選択解除します。
 - Marketing Platform インストーラーの残りのすべてのステップに従い、要求されるすべての情報を入力します。
- すべてのインストーラーが完了した後、configTool ユーティリティーを使用して以下の手順を実行することにより、次のステップで実行する SQL スクリプトが正しく実行されることを確認します。
 - ルート・ノード Affinium から、すべての構成プロパティをエクスポートします。

例えば、以下のコマンドは、プロパティを config_property_export.xml というファイルにエクスポートします。このファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の install ディレクトリーに作成されます。これは Windows での例です。

```
configTool.bat -x -p "Affinium" -f
"C:¥Unica¥Platform¥install¥config_property_export.xml"
```

- ルート・ノード Affinium から、すべての構成プロパティを削除します。

例えば、以下のコマンドはプロパティを削除します。これは Windows での例です。

```
configTool.bat -d -o -p "Affinium"
```

- エクスポートした構成プロパティをインポートします。

例えば、以下のコマンドは、プロパティを、Marketing Platform インストール済み環境の install ディレクトリーにある config_property_export.xml というファイルからインポートします。これは Windows での例です。

```
configTool.bat -i -o -f
"C:¥Unica¥Platform¥install¥config_property_export.xml"
```

7. 以下の中の該当する表を使用して、新しい Marketing Platform インストール済み環境で提供されている SQL スクリプトを探し、ご使用の Marketing Platform システム・テーブル・データベースに対するものを見つけます。示されている順序で SQL スクリプトを実行します。

表 1. バージョン 8.0.x からアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
ManagerSchema_DB_Type_81upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade80to81
ManagerSchema_DB_Type_8201upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to8201
ManagerSchema_DB_Type_85upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to85
insert_new_85_locales.sql	db¥upgrade85to86
ManagerSchema_DB_Type_86upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade85to86
insert_new_8601_locales.sql	db¥upgrade86to8601
active_portlets.sql	db
ManagerSchema_DB_Type_90upg.sql DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade86to90

表 2. バージョン 8.1.x または 8.2.0 からアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
ManagerSchema_DB_Type_8201upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to8201
ManagerSchema_DB_Type_85upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to85
insert_new_85_locales.sql	db¥upgrade82to85
ManagerSchema_DB_Type_86upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade85to86
insert_new_8601_locales.sql	db¥upgrade86to8601
active_portlets.sql	db
ManagerSchema_DB_Type_90upg.sql DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade86to90

表 3. バージョン 8.2.0.1、およびそれより後で 8.2.0.7 より前のパッチ・バージョンからアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
ManagerSchema_DB_Type_85upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to85
insert_new_85_locales.sql	db¥upgrade82to85
ManagerSchema_DB_Type_86upg.sql。DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade85to86
insert_new_8601_locales.sql	db¥upgrade86to8601
active_portlets.sql	db
ManagerSchema_DB_Type_90upg.sql DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade86to90

8. upgrade86to90 バッチまたはシェル・スクリプトを実行します。これは、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin¥upgrade86to90 ディレクトリーにあります。
9. populateDb ユーティリティーを使用して、システム・テーブルにデフォルトの Marketing Platform 構成プロパティー、ユーザーとグループ、およびセキュリティーの役割と権限のデータを設定します。

このユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにあります。

例: populateDb -n Manager

10. 次の表の説明に従い、configTool ユーティリティーを使用して構成プロパティーをインポートします。コマンドの例は Windows システムの場合です。

configTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにあります。コマンドの例は Windows システムの場合です。

コマンドの例は Windows システムの場合です。

構成プロパティーの機能について詳しくは、「設定」>「構成」 ページのオンライン・ヘルプか、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

表 4. バージョン 8.0.x、8.1.x、または 8.2.x (8.2.0.7 より前) からアップグレードする場合に使用するテーブル

ファイル名、場所、目的	コマンド例
「LDAP BaseDN 定期検索が有効」というプロパティーが、「Platform セキュリティー ログイン方法の詳細 LDAP 同期」カテゴリーの下に存在する場合は、このインポートをスキップしてください。これは、この手順のステップ 1 で確認したプロパティーです。 このプロパティーが存在しない場合は、次のインポートを実行します。 - ファイル: Ldap_Auto_Sync_BaseDN_Settings.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: DN による LDAP インポート検索を有効にする構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite security ldapSynchronization ldapProperties" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥ Ldap_Auto_Sync_BaseDN_Settings.xml</pre>
- ファイル: interaction_history_scheduler.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: Interaction History で必要なスケジューラー構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite scheduler taskRegistrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥ interaction_history_scheduler.xml</pre>
- ファイル: attribution_modeler_scheduler.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: Attribution Modeler で必要なスケジューラー構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite scheduler taskRegistrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥ attribution_modeler_scheduler.xml</pre>
- ファイル: coremetrics_configuration.xml および coremetrics_navigation.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: IBM Digital Analytics でのシングル・サインオンに必要な構成プロパティーのインポート	- configTool.bat -i -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml - configTool.bat -i -p "Affinium suite uiNavigation mainMenu Analytics" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_navigation.xml
- ファイル: cognos10_integration.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: レポート作成に必要な構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium Report integrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥cognos10_integration.xml</pre>

表 4. バージョン 8.0.x、8.1.x、または 8.2.x (8.2.0.7 より前) からアップグレードする場合に使用するテーブル (続き)

ファイル名、場所、目的	コマンド例
- ファイル: ファイルなし - プロパティーの削除 - 目的: 使用されなくなった JMS 構成プロパティーの削除	<code>configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsServer"</code> <code>configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsPort"</code>
- ファイル: LDAP_Anonymous_bind.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の <code>conf/upgrade85to86</code> ディレクトリー - 目的: バージョン 8.2.0 以降からのアップグレードの場合のみ。新しい LDAP 構成プロパティーのインポート	<code>configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsServer"</code> <code>configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsPort"</code>
- ファイル: quicklinks_category.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の <code>conf¥upgrade86to90</code> ディレクトリー - 目的: クイック・リンク・ダッシュボード・ポートレットのプロパティーのインポート	<code>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥quicklinks_category.xml</code>
- ファイル: communication_email.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の <code>conf¥upgrade86to90</code> ディレクトリー - 目的: E メール通知を有効にするための構成プロパティーのインポート	<code>configTool.bat -i -o -p "Affinium Manager" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥communication_email.xml</code>
- ファイル: notification.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の <code>conf¥upgrade86to90</code> ディレクトリー - 目的: 通知機能のための構成プロパティーのインポート	<code>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥notification.xml</code>
- ファイル: manager_alerts_registration.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の <code>conf</code> ディレクトリー - 目的: アラート・メニュー項目を作成する構成プロパティーのインポート	<code>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation alerts" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥manager_alerts_registration.xml</code>
- ファイル: disablePageTagging.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の <code>conf¥upgrade82to85</code> ディレクトリー - 目的: IBM が、製品の全体的な使用傾向を記録する基本的な統計を収集できるかどうかを決定する構成プロパティーのインポート	<code>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade82to85¥disablePageTagging.xml</code>

表 4. バージョン 8.0.x、8.1.x、または 8.2.x (8.2.0.7 より前) からアップグレードする場合に使用するテーブル (続き)

ファイル名、場所、目的	コマンド例
- ファイル: coremetrics_configuration.xml および coremetrics_navigation.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: IBM Digital Analytics でのシングル・サインオンに必要な構成プロパティのインポート	- configTool.bat -i -o -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml - configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation mainMenu Analytics" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_navigation.xml
- ファイル: coremetrics_configuration.xml および coremetrics_navigation.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: IBM Digital Analytics でのシングル・サインオンに必要な構成プロパティのインポート	- configTool.bat -i -o -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml - configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation mainMenu Analytics" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_navigation.xml

11. alertConfigTool ユーティリティを使用し、次のようにして、Marketing Platform のアラートと通知を登録します。

alertConfigTool ユーティリティは、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin ディレクトリーにあります。

このユーティリティを tools¥bin ディレクトリーから実行します。このとき、Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリーにある Platform_alerts_configuration.xml ファイルを参照します。

コマンド例 (Windows): alertConfigTool.bat -i -f C:¥Platform¥conf¥Platform_alerts_configuration.xml

12. ダッシュボードをアップグレードするために、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin ディレクトリーにある upgrade85Dashboard スクリプトを実行します。
13. 以下に従って、「ヘルプ」>「バージョン情報」ページを更新します。

- a. configTool ユーティリティを使用して、「Affinium | Manager | about」カテゴリーをエクスポートします (このカテゴリーは非表示としてマークされているため、「構成」ページには表示されません)。

例 (Windows): configTool.bat -x -p "Affinium|Manager|about" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥about.xml

- b. 以下のように、直前で作成したエクスポート XML ファイル (例の about.xml) を編集して、バージョン番号および表示名を変更します。

releaseNumber プロパティを見つけ、値を Marketing Platform の現行バージョンに変更します。以下の例の 8.0.0 をご使用の新規バージョンに変更します。

```
<property name="releaseNumber" type="string">
```

```
<displayNameKey>about.releaseNumber</displayNameKey>
```

```
<value>8.0.0</value>
```

```
</property>
```

- c. configTool ユーティリティを使用して、変更されたファイルをインポートします。 -o オプションを使用して、ノードを上書きする必要があります。インポートするには親ノードを指定する必要があります。

例 (Windows): configTool.bat -i -p "Affinium|Manager" -f "about.xml" -o

14. 23 ページの『第 4 章 IBM Marketing Platform の配置』の章の説明に従って、インストール済み環境を配置して、検証します。

IBM EMM アプリケーションをアップグレードした後、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照して、レポート作成をアップグレードするために必要な追加の手順を実行してください。

手動マイグレーションでバージョン 8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョンからアップグレードするには

この手順は、Marketing Platform バージョン 8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョンからのアップグレードにのみ当てはまります。

他のバージョンからのアップグレードに関する情報は、33 ページの『Marketing Platform のアップグレードのシナリオ』を参照してください。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー

また、Marketing Platform 8.x のインストール済み環境が正常に機能すること、およびコマンド・ライン・ツールを実行できることも確認してください。この手順では、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある 3 つの Marketing Platform ユーティリティを使用する必要があります。これらのユーティリティの使用に関する詳しい情報 (共通タスクのコマンド例を含む) は、以下から入手できます。

- 73 ページの『populateDb ユーティリティ』
- 64 ページの『configTool ユーティリティ』
- 68 ページの『alertConfigTool ユーティリティ』

1. IBM EMM にログインして、「設定」>「構成」ページにナビゲートし、「LDAP BaseDN 定期検索が有効」という名前のプロパティ (「Platform | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期」カテゴリ) が存在するかどうかを判別します。

この情報は後のステップで使用します。

2. Marketing Platform システム・テーブル・データベースのバックアップを作成します。

重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

3. 現行バージョンを配置解除します。
4. IBM マスター・インストーラーを実行します。

IBM マスター・インストーラーが開始します。IBM マスター・インストーラーで、以下のガイドラインに従います。

- Marketing Platform データベース接続情報の入力を求めるプロンプトが IBM マスター・インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform システム・テーブルに関する情報を入力します。
- インストール・ディレクトリを選択するように求めるプロンプトが IBM マスター・インストーラーから出されたら、ルート・インストール・ディレクトリを選択します (このルート・ディレクトリの下にある Marketing Platform インストール・ディレクトリではありません)。

IBM マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

5. Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
 - インストール・ディレクトリを求めるプロンプトが Marketing Platform インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform インストールのディレクトリ (通常 Platform という名前) を選択します。
 - インストーラーに前のインストールをバックアップさせます。
 - 「**手動データベース・セットアップ**」を選択します。
 - 「**Platform の構成の実行**」チェック・ボックスを選択解除します。
 - Marketing Platform インストーラーの残りのすべてのステップに従い、要求されるすべての情報を入力します。
6. すべてのインストーラーが完了した後、configTool ユーティリティーを使用して以下の手順を実行することにより、この後のステップで実行する SQL スクリプトが正しく実行できるようにします。
 - a. ルート・ノード Affinium から、すべての構成プロパティをエクスポートします。

例えば、以下のコマンドは、プロパティを config_property_export.xml というファイルにエクスポートします。このファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の install ディレクトリに作成されます。これは Windows での例です。

```
configTool.bat -x -p "Affinium" -f  
"C:¥Unica¥Platform¥install¥config_property_export.xml"
```

- b. ルート・ノード Affinium から、すべての構成プロパティを削除します。

例えば、以下のコマンドはプロパティを削除します。これは Windows での例です。

```
configTool.bat -d -o -p "Affinium"
```

- c. エクスポートした構成プロパティをインポートします。

例えば、以下のコマンドは、プロパティを、Marketing Platform インストール済み環境の `install` ディレクトリーにある `config_property_export.xml` というファイルからインポートします。これは Windows での例です。

```
configTool.bat -i -o -f
"C:¥Unica¥Platform¥install¥config_property_export.xml"
```

7. Marketing Platform インストール済み環境の `db¥upgrade82to85` ディレクトリーで、SQL スクリプトを次のように編集します。

- a. 編集する SQL スクリプトは `ManagerSchema_DB_Type_86upg.sql` です (`DB_Type` はご使用のシステム・テーブル・データベースのデータベース・タイプ)。
- b. すべてのデータベース・タイプについて、次のステートメントを削除します。

```
ALTER TABLE USCH_RUN ADD PAYLOAD NVARCHAR(4000);
```

- c. ご使用のデータベースが DB2 の場合は、以下のステートメントも削除します。

```
ALTER TABLE qrtz_job_details ALTER COLUMN job_data SET DATA TYPE
blob(4000);
```

```
ALTER TABLE qrtz_triggers ALTER COLUMN job_data SET DATA TYPE
blob(4000);
```

8. 以下の中の該当する表を使用して、新しい Marketing Platform インストール済み環境で提供されている SQL スクリプトを探し、ご使用の Marketing Platform システム・テーブル・データベースに対するものを見つけます。示されている順序で SQL スクリプトを実行します。

表 5. バージョン 8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョンからアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
<code>ManagerSchema_DB_Type_85upg.sql</code> 。 <code>DB_Type</code> は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	<code>db¥upgrade82to85</code>
<code>insert_new_85_locales.sql</code>	<code>db¥upgrade82to85</code>
<code>ManagerSchema_DB_Type_86upg.sql</code> 。 <code>DB_Type</code> は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	<code>db¥upgrade85to86</code>
<code>insert_new_8601_locales.sql</code>	<code>db¥upgrade86to8601</code>
<code>active_portlets.sql</code>	<code>db</code>
<code>ManagerSchema_DB_Type_90upg.sql</code> <code>DB_Type</code> は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	<code>db¥upgrade86to90</code>

9. `upgrade86to90` バッチまたはシェル・スクリプトを実行します。これは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools¥bin¥upgrade86to90` ディレクトリーにあります。

10. populateDb ユーティリティーを使用して、システム・テーブルにデフォルトの Marketing Platform 構成プロパティ、ユーザーとグループ、およびセキュリティの役割と権限のデータを設定します。

このユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにあります。

例: populateDb -n Manager

11. 次の表の説明に従い、configTool ユーティリティーを使用して構成プロパティをインポートします。コマンドの例は Windows システムの場合です。

configTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにあります。コマンドの例は Windows システムの場合です。

コマンドの例は Windows システムの場合です。

構成プロパティの機能について詳しくは、「設定」>「構成」 ページのオンライン・ヘルプか、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

表 6. バージョン 8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョンからアップグレードする場合に使用するテーブル

ファイル名、場所、目的	コマンド例
「LDAP BaseDN 定期検索が有効」というプロパティが、「Platform セキュリティー ログイン方法の詳細 LDAP 同期」カテゴリーの下に存在する場合は、このインポートをスキップしてください。これは、この手順のステップ 1 で確認したプロパティです。 このプロパティが存在しない場合は、次のインポートを実行します。 - ファイル: Ldap_Auto_Sync_BaseDN_Settings.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: DN による LDAP インポート検索を有効にする構成プロパティのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite security ldapSynchronization ldapProperties" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥ Ldap_Auto_Sync_BaseDN_Settings.xml</pre>
- ファイル: interaction_history_scheduler.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: Interaction History で必要なスケジューラー構成プロパティのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite scheduler taskRegistrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥ interaction_history_scheduler.xml</pre>

表 6. バージョン 8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョンからアップグレードする場合に使用するテーブル (続き)

ファイル名、場所、目的	コマンド例
- ファイル: attribution_modeler_scheduler.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: Attribution Modeler で必要なスケジューラー構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite scheduler taskRegistrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥ attribution_modeler_scheduler.xml</pre>
- ファイル: coremetrics_configuration.xml および coremetrics_navigation.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: IBM Digital Analytics でのシングル・サインオンに必要な構成プロパティーのインポート	- configTool.bat -i -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml - configTool.bat -i -p "Affinium suite uiNavigation mainMenu Analytics" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_navigation.xml
- ファイル: cognos10_integration.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: レポート作成に必要な構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium Report integrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥cognos10_integration.xml</pre>
- ファイル: ファイルなし - プロパティーの削除 - 目的: 使用されなくなった JMS 構成プロパティーの削除	- configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsServer" - configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsPort"
- ファイル: LDAP_Anonymous_bind.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: バージョン 8.2.0 以降からのアップグレードの場合のみ。新しい LDAP 構成プロパティーのインポート	- configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsServer" - configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsPort"
- ファイル: quicklinks_category.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: クイック・リンク・ダッシュボード・ポートレットのプロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥quicklinks_category.xml</pre>
- ファイル: communication_email.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: E メール通知を有効にするための構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium Manager" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥communication_email.xml</pre>

表 6. バージョン 8.2.0.7 以降の 8.2.x バージョンからアップグレードする場合に使用するテーブル (続き)

ファイル名、場所、目的	コマンド例
- ファイル: notification.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: 通知機能のための構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥notification.xml</pre>
- ファイル: manager_alerts_registration.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: アラート・メニュー項目を作成する構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation alerts" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥manager_alerts_registration.xml</pre>
- ファイル: disablePageTagging.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade82to85 ディレクトリー - 目的: IBM が、製品の全体的な使用傾向を記録する基本的な統計を収集できるかどうかを決定する構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade82to85¥disablePageTagging.xml</pre>
- ファイル: coremetrics_configuration.xml および coremetrics_navigation.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: IBM Digital Analytics でのシングル・サインオンに必要な構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation mainMenu Analytics" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_navigation.xml</pre>
- ファイル: coremetrics_configuration.xml および coremetrics_navigation.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: IBM Digital Analytics でのシングル・サインオンに必要な構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation mainMenu Analytics" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_navigation.xml</pre>

12. alertConfigTool ユーティリティーを使用し、次のようにして、Marketing Platform のアラートと通知を登録します。

alertConfigTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin ディレクトリーにあります。

このユーティリティーを tools¥bin ディレクトリーから実行します。このとき、Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリーにある Platform_alerts_configuration.xml ファイルを参照します。

コマンド例 (Windows): alertConfigTool.bat -i -f
C:¥Platform¥conf¥Platform_alerts_configuration.xml

13. ダッシュボードをアップグレードするために、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin ディレクトリーにある upgrade85Dashboard スクリプトを実行します。

14. 以下に従って、「ヘルプ」>「バージョン情報」ページを更新します。

- a. configTool ユーティリティーを使用して、「Affinium | Manager | about」カテゴリをエクスポートします (このカテゴリは非表示としてマークされているため、「構成」ページには表示されません)。

例 (Windows): configTool.bat -x -p "Affinium|Manager|about" -f
C:¥Unica¥Platform¥conf¥about.xml

- b. 以下のように、直前で作成したエクスポート XML ファイル (例の about.xml) を編集して、バージョン番号および表示名を変更します。

releaseNumber プロパティーを見つけ、値を Marketing Platform の現行バージョンに変更します。以下の例の 8.0.0 をご使用の新規バージョンに変更します。

```
<property name="releaseNumber" type="string">
```

```
<displayNameKey>about.releaseNumber</displayNameKey>
```

```
<value>8.0.0</value>
```

```
</property>
```

- c. configTool ユーティリティーを使用して、変更されたファイルをインポートします。-o オプションを使用して、ノードを上書きする必要があります。インポートするには親ノードを指定する必要があります。

例 (Windows): configTool.bat -i -p "Affinium|Manager" -f "about.xml" -o

15. 23 ページの『第 4 章 IBM Marketing Platform の配置』の章の説明に従って、インストール済み環境を配置して、検証します。

IBM EMM アプリケーションをアップグレードした後、「IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド」を参照して、レポート作成をアップグレードするために必要な追加の手順を実行してください。

手動マイ그레이ションでバージョン 8.5.x からアップグレードするには

この手順は、Marketing Platform バージョン 8.5.x からのアップグレードにのみ当てはまります。これらのバージョンからの自動アップグレードはサポートされていません。

他のバージョンからのアップグレードに関する情報は、33 ページの『Marketing Platform のアップグレードのシナリオ』を参照してください。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー

また、Marketing Platform 8.x のインストール済み環境が正常に機能すること、およびコマンド・ライン・ツールを実行できることも確認してください。この手順では、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリーにある 3 つの Marketing Platform ユーティリティーを使用する必要があります。これらのユーティリティーの使用に関する詳しい情報 (共通タスクのコマンド例を含む) は、以下から入手できます。

- 73 ページの『populateDb ユーティリティー』
- 64 ページの『configTool ユーティリティー』
- 68 ページの『alertConfigTool ユーティリティー』

1. IBM EMM にログインして、「設定」>「構成」ページにナビゲートし、「**LDAP BaseDN 定期検索が有効**」という名前のプロパティ（「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期**」カテゴリ）が存在するかどうかを判別します。

この情報は後のステップで使用します。

2. Marketing Platform システム・テーブル・データベースのバックアップを作成します。

重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

3. 現行バージョンを配置解除します。
4. IBM マスター・インストーラーを実行します。

IBM マスター・インストーラーが開始します。IBM マスター・インストーラーで、以下のガイドラインに従います。

- Marketing Platform データベース接続情報の入力を求めるプロンプトが IBM マスター・インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform システム・テーブルに関する情報を入力します。
- インストール・ディレクトリーを選択するように求めるプロンプトが IBM マスター・インストーラーから出されたら、ルート・インストール・ディレクトリーを選択します (このルート・ディレクトリーの下にある Marketing Platform インストール・ディレクトリーではありません)。

IBM マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

5. Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
 - インストール・ディレクトリーを求めるプロンプトが Marketing Platform インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform インストールのディレクトリー (通常 Platform という名前) を選択します。
 - インストーラーに前のインストールをバックアップさせます。
 - 「**手動データベース・セットアップ**」を選択します。
 - 「**Platform の構成の実行**」チェック・ボックスを選択解除します。

- Marketing Platform インストーラーの残りのすべてのステップに従い、要求されるすべての情報を入力します。

6. すべてのインストーラーが完了した後、Marketing Platform インストール済み環境の `db¥upgrade85to86` ディレクトリーで、SQL スクリプトを以下のように編集します。

- 編集する SQL スクリプトは `ManagerSchema_DB_Type_86upg.sql` です (`DB_Type` はご使用のシステム・テーブル・データベースのデータベース・タイプ)。
- すべてのデータベース・タイプについて、次のステートメントを削除します。

```
ALTER TABLE USCH_RUN ADD PAYLOAD NVARCHAR(4000);
```

- ご使用のデータベースが DB2 の場合は、以下のステートメントも削除します。

```
ALTER TABLE qrtz_job_details ALTER COLUMN job_data SET DATA TYPE blob(4000);
```

```
ALTER TABLE qrtz_triggers ALTER COLUMN job_data SET DATA TYPE blob(4000);
```

7. 以下の中の該当する表を使用して、新しい Marketing Platform インストール済み環境で提供されている SQL スクリプトを探し、ご使用の Marketing Platform システム・テーブル・データベースに対するものを見つけます。示されている順序で SQL スクリプトを実行します。

表 7. バージョン 8.5.x からアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
<code>ManagerSchema_DB_Type_86upg.sql</code> 。 <code>DB_Type</code> は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	<code>db¥upgrade85to86</code>
<code>active_portlets.sql</code>	<code>db</code>
<code>ManagerSchema_DB_Type_90upg.sql</code> <code>DB_Type</code> は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	<code>db¥upgrade86to90</code>

- `upgrade86to90` バッチまたはシェル・スクリプトを実行します。これは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools¥bin¥upgrade86to90` ディレクトリーにあります。
- `populateDb` ユーティリティーを使用して、システム・テーブルにデフォルトの Marketing Platform 構成プロパティー、ユーザーとグループ、およびセキュリティの役割と権限のデータを設定します。

このユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

例: `populateDb -n Manager`

- 次の表の説明に従い、`configTool` ユーティリティーを使用して構成プロパティーをインポートします。コマンドの例は Windows システムの場合です。

configTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにあります。コマンドの例は Windows システムの場合です。

コマンドの例は Windows システムの場合です。

構成プロパティーの機能について詳しくは、「設定」>「構成」 ページのオンライン・ヘルプか、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

表 8. バージョン 8.5.x からアップグレードする場合に使用するテーブル

ファイル名、場所、目的	コマンド例
「LDAP BaseDN 定期検索が有効」というプロパティーが、「Platform セキュリティー ログイン方法の詳細 LDAP 同期」カテゴリの下に存在する場合は、このインポートをスキップしてください。これは、この手順のステップ 1 で確認したプロパティーです。 このプロパティーが存在しない場合は、次のインポートを実行します。 - ファイル: Ldap_Auto_Sync_BaseDN_Settings.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: DN による LDAP インポート検索を有効にする構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite security ldapSynchronization ldapProperties" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥ Ldap_Auto_Sync_BaseDN_Settings.xml</pre>
- ファイル: interaction_history_scheduler.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: Interaction History で必要なスケジューラー構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite scheduler taskRegistrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥ interaction_history_scheduler.xml</pre>
- ファイル: attribution_modeler_scheduler.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: Attribution Modeler で必要なスケジューラー構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite scheduler taskRegistrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥ attribution_modeler_scheduler.xml</pre>

表 8. バージョン 8.5.x からアップグレードする場合に使用するテーブル (続き)

ファイル名、場所、目的	コマンド例
- ファイル: coremetrics_configuration.xml および coremetrics_navigation.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: IBM Digital Analytics でのシングル・サインオンに必要な構成プロパティのインポート	- configTool.bat -i -p "Affinium" -f C:\¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml - configTool.bat -i -p "Affinium suite uiNavigation mainMenu Analytics" -f C:\¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_navigation.xml
- ファイル: cognos10_integration.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: レポート作成に必要な構成プロパティのインポート	configTool.bat -i -p "Affinium Report integrations" -f C:\¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥cognos10_integration.xml
- ファイル: ファイルなし - プロパティの削除 - 目的: 使用されなくなった JMS 構成プロパティの削除	- configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsServer" - configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsPort"
- ファイル: LDAP_Anonymous_bind.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリー - 目的: バージョン 8.2.0 以降からのアップグレードの場合のみ。新しい LDAP 構成プロパティのインポート	- configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsServer" - configTool.bat -d -o -p "Affinium suite jmsPort"
- ファイル: quicklinks_category.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: クイック・リンク・ダッシュボード・ポートレットのプロパティのインポート	configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:\¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥quicklinks_category.xml
- ファイル: communication_email.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: E メール通知を有効にするための構成プロパティのインポート	configTool.bat -i -o -p "Affinium Manager" -f C:\¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥communication_email.xml
- ファイル: notification.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: 通知機能のための構成プロパティのインポート	configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:\¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥notification.xml

表 8. バージョン 8.5.x からアップグレードする場合に使用するテーブル (続き)

ファイル名、場所、目的	コマンド例
- ファイル: manager_alerts_registration.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: アラート・メニュー項目を作成する構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation alerts" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥manager_alerts_registration.xml</pre>
- ファイル: disablePageTagging.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade82to85 ディレクトリー - 目的: IBM が、製品の全体的な使用傾向を記録する基本的な統計を収集できるかどうかを決定する構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade82to85¥disablePageTagging.xml</pre>
- ファイル: coremetrics_configuration.xml および coremetrics_navigation.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: IBM Digital Analytics でのシングル・サインオンに必要な構成プロパティーのインポート	- configTool.bat -i -o -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml - configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation mainMenu Analytics" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_navigation.xml

11. alertConfigTool ユーティリティを使用し、次のようにして、Marketing Platform のアラートと通知を登録します。

alertConfigTool ユーティリティは、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin ディレクトリーにあります。

このユーティリティを tools¥bin ディレクトリーから実行します。このとき、Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリーにある Platform_alerts_configuration.xml ファイルを参照します。

コマンド例 (Windows): alertConfigTool.bat -i -f
C:¥Platform¥conf¥Platform_alerts_configuration.xml

12. ダッシュボードをアップグレードするために、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin ディレクトリーにある upgrade85Dashboard スクリプトを実行します。

13. 以下に従って、「ヘルプ」>「バージョン情報」ページを更新します。

- a. configTool ユーティリティを使用して、「Affinium | Manager | about」カテゴリーをエクスポートします (このカテゴリーは非表示としてマークされているため、「構成」ページには表示されません)。

例 (Windows): configTool.bat -x -p "Affinium|Manager|about" -f
C:¥Unica¥Platform¥conf¥about.xml

- b. 以下のように、直前で作成したエクスポート XML ファイル (例の about.xml) を編集して、バージョン番号および表示名を変更します。

releaseNumber プロパティを見つけ、値を Marketing Platform の現行バージョンに変更します。以下の例の 8.0.0 をご使用の新規バージョンに変更します。

```
<property name="releaseNumber" type="string">  
  
<displayNameKey>about.releaseNumber</displayNameKey>  
  
<value>8.0.0</value>  
  
</property>
```

- c. configTool ユーティリティを使用して、変更されたファイルをインポートします。 -o オプションを使用して、ノードを上書きする必要があります。インポートするには親ノードを指定する必要があります。

例 (Windows): configTool.bat -i -p "Affinium|Manager" -f "about.xml" -o

14. 23 ページの『第 4 章 IBM Marketing Platform の配置』の章の説明に従って、インストール済み環境を配置して、検証します。

IBM EMM アプリケーションをアップグレードした後、「IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド」を参照して、レポート作成をアップグレードするために必要な追加の手順を実行してください。

手動マイグレーションでバージョン 8.6.x からアップグレードするには

この手順は、Marketing Platform バージョン 8.6.x からのアップグレードにのみ当てはまります。これらのバージョンからの自動アップグレードはサポートされていません。

他のバージョンからのアップグレードに関する情報は、33 ページの『Marketing Platform のアップグレードのシナリオ』を参照してください。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー

また、Marketing Platform のインストール済み環境が正常に機能すること、およびコマンド・ライン・ツールを実行できることも確認してください。この手順では、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある 3 つの Marketing Platform ユーティリティを使用する必要があります。これらのユーティリティの使用に関する詳しい情報 (共通タスクのコマンド例を含む) は、以下から入手できます。

- 73 ページの『populateDb ユーティリティ』
- 64 ページの『configTool ユーティリティ』
- 68 ページの『alertConfigTool ユーティリティ』

1. IBM EMM にログインして、「設定」>「構成」ページにナビゲートし、「LDAP BaseDN 定期検索が有効」という名前のプロパティ（「Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期」カテゴリ）が存在するかどうかを判別します。

この情報は後のステップで使用します。

2. Marketing Platform システム・テーブル・データベースのバックアップを作成します。

重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

3. 現行バージョンを配置解除します。
4. IBM マスター・インストーラーを実行します。

IBM マスター・インストーラーが開始します。IBM マスター・インストーラーで、以下のガイドラインに従います。

- Marketing Platform データベース接続情報の入力を求めるプロンプトが IBM マスター・インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform システム・テーブルに関する情報を入力します。
- インストール・ディレクトリを選択するように求めるプロンプトが IBM マスター・インストーラーから出されたら、ルート・インストール・ディレクトリを選択します（このルート・ディレクトリの下にある Marketing Platform インストール・ディレクトリではありません）。

IBM マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

5. Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
 - インストール・ディレクトリを求めるプロンプトが Marketing Platform インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform インストールのディレクトリ（通常 Platform という名前）を選択します。
 - インストーラーに前のインストールをバックアップさせます。
 - 「手動データベース・セットアップ」を選択します。
 - 「Platform の構成の実行」チェック・ボックスを選択解除します。
 - Marketing Platform インストーラーの残りのすべてのステップに従い、要求されるすべての情報を入力します。
6. すべてのインストーラーが終了した後、Marketing Platform の新規インストール済み環境で提供されている次の SQL スクリプトを、Marketing Platform システム・テーブル・データベースに対して実行します。

ManagerSchema_DB_Type_90upg.sql

DB_Type は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。

このファイルは Marketing Platform インストール済み環境の db¥upgrade86to90 ディレクトリにあります。

7. upgrade86to90 バッチまたはシェル・スクリプトを実行します。これは、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin¥upgrade86to90 ディレクトリーにあります。
8. 次の表の説明に従い、configTool ユーティリティーを使用して構成プロパティーをインポートします。

configTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにあります。コマンドの例は Windows システムの場合です。

コマンドの例は Windows システムの場合です。

構成プロパティーの機能について詳しくは、「設定」>「構成」ページのオンライン・ヘルプか、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

表 9. バージョン 8.6.0 からアップグレードする場合に使用するテーブル

ファイル名、場所、目的	コマンド例
「LDAP BaseDN 定期検索が有効」というプロパティーが、「Platform セキュリティー ログイン方法の詳細 LDAP 同期」カテゴリの下に存在する場合は、このインポートをスキップしてください。これは、この手順のステップ 1 で確認したプロパティーです。 このプロパティーが存在しない場合は、次のインポートを実行します。 - ファイル: Ldap_Auto_Sync_BaseDN_Settings.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: DN による LDAP インポート検索を有効にする構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -p "Affinium suite security ldapSynchronization ldapProperties" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥ Ldap_Auto_Sync_BaseDN_Settings.xml</pre>
- ファイル: quicklinks_category.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: クイック・リンク・ダッシュボード・ポートレットのプロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥quicklinks_category.xml</pre>
- ファイル: communication_email.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: E メール通知を有効にするための構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium Manager" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥communication_email.xml</pre>

表 9. バージョン 8.6.0 からアップグレードする場合に使用するテーブル (続き)

ファイル名、場所、目的	コマンド例
- ファイル: notification.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade86to90 ディレクトリー - 目的: 通知機能のための構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade86to90¥notification.xml</pre>
- ファイル: manager_alerts_registration.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリー - 目的: アラート・メニュー項目を作成する構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite uiNavigation alerts" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥manager_alerts_registration.xml</pre>
- ファイル: disablePageTagging.xml - 場所: Marketing Platform インストール済み環境の conf¥upgrade82to85 ディレクトリー - 目的: IBM が、製品の全体的な使用傾向を記録する基本的な統計を収集できるかどうかを決定する構成プロパティーのインポート	<pre>configTool.bat -i -o -p "Affinium suite" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade82to85¥disablePageTagging.xml</pre>

9. alertConfigTool ユーティリティーを使用し、次のようにして、Marketing Platform のアラートと通知を登録します。

alertConfigTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools¥bin ディレクトリーにあります。

このユーティリティーを tools¥bin ディレクトリーから実行します。このとき、Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリーにある Platform_alerts_configuration.xml ファイルを参照します。

コマンド例 (Windows): alertConfigTool.bat -i -f
C:¥Platform¥conf¥Platform_alerts_configuration.xml

10. 以下に従って、「ヘルプ」>「バージョン情報」ページを更新します。
 - a. configTool ユーティリティーを使用して、「Affinium | Manager | about」カテゴリーをエクスポートします (このカテゴリーは非表示としてマークされているため、「構成」ページには表示されません)。

例 (Windows): configTool -x -p "Affinium|Manager|about" -f
C:¥Unica¥Platform¥conf¥about.xml

- b. 以下のように、直前で作成したエクスポート XML ファイル (例の about.xml) を編集して、バージョン番号および表示名を変更します。

releaseNumber プロパティを見つけ、値を Marketing Platform の現行バージョンに変更します。以下の例の 8.0.0 をご使用の新規バージョンに変更します。

```
<property name="releaseNumber" type="string">  
  
<displayNameKey>about.releaseNumber</displayNameKey>  
  
<value>8.0.0</value>  
  
</property>
```

- c. configTool ユーティリティを使用して、変更されたファイルをインポートします。 -o オプションを使用して、ノードを上書きする必要があります。インポートする際には親ノードを指定する必要があります。

例 (Windows): configTool -i -p "Affinium|Manager" -f "about.xml" -o

11. 23 ページの『第 4 章 IBM Marketing Platform の配置』の章の説明に従って、インストール済み環境を配置して、検証します。

IBM EMM アプリケーションをアップグレードした後、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照して、レポート作成をアップグレードするために必要な追加の手順を実行してください。

付録 A. Marketing Platform ユーティリティーについて

このセクションでは、Marketing Platform の概要を示します。これには、すべてのユーティリティーに当てはまり、個別のユーティリティーの説明では扱われていない詳細が含まれます。

ユーティリティーの場所

Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

ユーティリティーのリストと説明

Marketing Platform は、以下のユーティリティーを提供します。

- 64 ページの『`configTool` ユーティリティー』 - 構成設定 (製品の登録を含む) のインポート、エクスポート、および削除を行います。
- 68 ページの『`alertConfigTool` ユーティリティー』 - IBM EMM 製品のアラートと構成を登録します。
- 68 ページの『`datafilteringScriptTool` ユーティリティー』 - データ・フィルターを作成します。
- 70 ページの『`encryptPasswords` ユーティリティー』 - パスワードを暗号化および保管します。
- 71 ページの『`partitionTool` ユーティリティー』 - パーティションのデータベース・エントリーを作成します。
- 73 ページの『`populateDb` ユーティリティー』 - Marketing Platform データベースにデータを設定します。
- 74 ページの『`restoreAccess` ユーティリティー』 - ユーザーに `platformAdminRole` 役割を復元します。
- 76 ページの『`scheduler_console_client` ユーティリティー』 - トリガーを `listen` するように構成されている IBM EMM のスケジューラー・ジョブをリストまたは開始します。

Marketing Platform ユーティリティーを実行するための前提条件

以下は、すべての Marketing Platform ユーティリティーを実行するための前提条件です。

- すべてのユーティリティーは、それらが存在するディレクトリー (デフォルトでは、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリー) から実行します。
- UNIX では、ベスト・プラクティスは、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを実行するユーザー・アカウントと同じユーザー・アカウントでユーティリティーを実行することです。異なるユーザー・アカウントでユーティリティーを実行する場合、`platform.log` ファイルの権限を調整して、そのユーザー・アカウントがこのファイルに書き込めるようにします。権限を調整

しないと、ユーティリティーはログ・ファイルに書き込むことができず、ツールは正しく機能しているのにエラー・メッセージが表示される可能性があります。

接続の問題のトラブルシューティング

encryptPasswords を除くすべての Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルと対話します。システム・テーブル・データベースに接続するために、これらのユーティリティーは以下の接続情報を使用します。この情報は、Marketing Platform のインストール時に提供される情報を使ってインストーラーによって設定されます。この情報は、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにある jdbc.properties ファイルに保管されます。

- JDBC ドライバー名
- JDBC 接続 URL (ホスト、ポート、およびデータベース名を含む)
- データ・ソース・ログイン
- データ・ソース・パスワード (暗号化)

さらに、これらのユーティリティーは、Marketing Platform のインストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトまたはコマンド行で設定された、JAVA_HOME 環境変数に依存しています。この変数は Marketing Platform インストーラーによって setenv スクリプトで自動的に設定されるはずですが、ユーティリティーの実行に問題がある場合は JAVA_HOME 変数が設定されていることを確認することをお勧めします。JDK は Sun バージョンでなければなりません (例えば WebLogic で入手できる JRockit JDK は不可です)。

特殊文字

オペレーティング・システムで予約文字として指定されている文字は、エスケープする必要があります。予約文字のリストおよびそれをエスケープする方法については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティーの標準オプション

すべての Marketing Platform ユーティリティーで、以下のオプションを使用できます。

-l logLevel

コンソールに表示されるログ情報のレベルを設定します。オプションは、high、medium、および low です。デフォルトは low です。

-L

コンソール・メッセージのロケールを設定します。デフォルト・ロケールは en_US です。使用可能なオプション値は、Marketing Platform が翻訳されている言語に依存します。ISO 639-1 および ISO 3166 に応じて、ICU ロケール ID を使ってロケールを指定します。

-h

使用法に関する簡潔なメッセージをコンソールに表示します。

-m

このユーティリティのマニュアル・ページをコンソールに表示します。

-v

実行の詳細をコンソールに表示します。

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティの実行

Marketing Platform がインストールされているマシンでは、追加の構成を行わずに Marketing Platform ユーティリティを実行することができます。しかし、ユーティリティをネットワーク上の別のマシンから実行することもできます。この手順では、それを行うために必要なステップについて説明します。

追加マシンで Marketing Platform ユーティリティをセットアップする方法

1. この手順を実行するマシンが以下の前提条件を満たしていることを確認してください。
 - 正しい JDBC ドライバーがマシンに存在しているか、マシンからアクセス可能でなければなりません。
 - マシンに Marketing Platform システム・テーブルへのネットワーク・アクセスがなければなりません。
 - マシンに Java ランタイム環境がインストールされているか、マシンからアクセス可能でなければなりません。
2. Marketing Platform システム・テーブルに関する以下の情報を収集します。
 - JDBC ドライバー・ファイルのシステム上の完全修飾パス。
 - Java ランタイム環境のインストール先への完全修飾パス。

インストーラーでのデフォルト値は、IBM のインストール・ディレクトリーの下にインストーラーが置いた、サポートされるバージョンの JRE へのパスです。このデフォルトを受け入れることも、別のパスを指定することもできます。

- データベース・タイプ
 - データベース・ホスト
 - データベース・ポート
 - データベース名/システム ID
 - データベース・ユーザー名
 - データベース・パスワード
3. IBM インストーラーを実行して、Marketing Platform をインストールします。

Marketing Platform システム・テーブルに関して収集したデータベース接続情報を入力します。IBM インストーラーに精通していない場合は、「Campaign インストール・ガイド」または「Marketing Operations インストール・ガイド」を参照してください。

Marketing Platform Web アプリケーションは、配置する必要ありません。

参照: Marketing Platform ユーティリティー

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティー、機能の詳細、構文、および例について説明します。

configTool ユーティリティー

「構成」ページのプロパティと値は、Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。 configTool ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルとの間で構成設定のインポートおよびエクスポートを行います。

configTool を使用する場合

configTool を使用する理由として、以下が考えられます。

- Campaign に付属のパーティションおよびデータ・ソース・テンプレートをインポートする場合。このテンプレートは、「構成」ページを使用して変更したり複製したりできます。
- 製品インストーラーがプロパティをデータベースに自動的に追加できない場合に IBM EMM 製品を登録する (その構成プロパティをインポートする)。
- バックアップのため、または IBM EMM の別のインストールにインポートするために、構成設定の XML バージョンをエクスポートする。
- 「**カテゴリーの削除**」リンクを持たないカテゴリーを削除する。これを行うには、configTool を使用して構成をエクスポートし、カテゴリーを作成する XML を手動で削除し、編集した XML を configTool を使用してインポートします。

重要: このユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブル・データベースの `usm_configuration` および `usm_configuration_values` テーブルを変更します。これには、構成プロパティとその値が含まれます。最良の結果を得るために、これらのテーブルのバックアップ・コピーを作成するか、または configTool を使用して既存の構成をエクスポートし、結果として生成されるファイルをバックアップします。このようにして、configTool を使用してインポートを行う際にエラーが発生したときに構成を復元できるようにしておきます。

有効な製品名

このセクションで後述するように、configTool ユーティリティーは、製品を登録および登録解除するコマンドで製品名をパラメーターとして使用します。 IBM EMM の 8.0.0 リリースでは、多くの製品名が変更されています。しかし、configTool によって認識される名前は変更されていません。以下に、configTool で使用する有効な製品名、および製品の現行名をリストします。

製品名	configTool で使用する名前
Marketing Platform	Manager
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact

製品名	configTool で使用する名前
Contact Optimization	Optimize
Marketing Operations	Plan
CustomerInsight	Insight
Digital Analytics for On Premises	NetInsight
PredictiveInsight	Model
Leads	Leads

構文

```
configTool -d -p "elementPath" [-o]
```

```
configTool -i -p "parent ElementPath" -f importFile [-o]
```

```
configTool -x -p "elementPath" -f exportFile
```

```
configTool -r productName -f registrationFile [-o]
```

```
configTool -u productName
```

コマンド

-d -p "elementPath"

構成プロパティ階層内のパスを指定して、構成プロパティとその設定を削除します。

要素パスは、カテゴリおよびプロパティの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、希望のカテゴリまたはプロパティを選択すると、右側のペインで括弧付きで表示されるものを取得できます。構成プロパティの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

次のことに注意してください。

- このコマンドでは、アプリケーション全体ではなく、アプリケーション内のカテゴリとプロパティだけを削除できます。アプリケーション全体を登録解除するには、-u コマンドを使用します。
- 「構成」ページで「**カテゴリの削除**」リンクを持たないカテゴリを削除するには、-o オプションを使用します。

-i -p "parentElementPath" -f importFile

指定された XML ファイルから構成プロパティとその設定をインポートします。

インポートするには、カテゴリ・インポート先の上の親要素へのパスを指定します。configTool ユーティリティは、パスで指定するカテゴリの下に プロパティをインポートします。

カテゴリは最上位より下のどのレベルにでも追加できますが、最上位カテゴリと同じレベルに追加することはできません。

親要素パスは、カテゴリおよびプロパティの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、希望のカテゴリまたはプロパティを選択すると、右側のペインで括弧付きで表示されるものを取得できます。構成プロパティの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

インポート・ファイルの場所は、tools/bin ディレクトリーからの相対パスで指定することも、完全ディレクトリー・パスで指定することもできます。相対パスを指定するかパスを指定しない場合、configTool はまず tools/bin ディレクトリーに相対するファイルを探します。

デフォルトではこのコマンドは既存のカテゴリを上書きしませんが、-o オプションを使用して上書きを強制することができます。

-x -p "elementPath" -f exportFile

構成プロパティとその設定を、指定された名前の XML ファイルにエクスポートします。

構成プロパティをすべてエクスポートすることも、構成プロパティ階層内のパスを指定することによってエクスポートを特定のカテゴリに制限することもできます。

要素パスは、カテゴリおよびプロパティの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、希望のカテゴリまたはプロパティを選択すると、右側のペインで括弧付きで表示されるものを取得できます。構成プロパティの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

エクスポート・ファイルの場所は、現行ディレクトリーからの相対パスで指定することも、完全ディレクトリー・パスで指定することもできます。ファイルの指定に区切り文字が含まれていない場合 (UNIX の場合は /、Windows の場合は \ または ¥)、configTool は、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにファイルを作成します。xml 拡張子を指定しなくても、configTool はそれを追加します。

-r productName -f registrationFile

アプリケーションを登録します。登録ファイルの場所は、tools/bin ディレクトリーからの相対パスにすることも、絶対パスにすることもできます。デフォルトではこのコマンドは既存の構成を上書きしませんが、-o オプションを使用して上書きを強制することができます。productName パラメーターは、上にリストしたものの 1 つでなければなりません。

次のことに注意してください。

- -r オプションを使用する場合、登録ファイルの最初のタグは、XML の <application> でなければなりません。

構成プロパティを Marketing Platform データベースに挿入するために使用できる他のファイルが製品で提供されている場合があります。それらのファイルでは、-i オプションを使用します。-r オプションでは、最初のタグが <application> タグのファイルだけを使用することができます。

- Marketing Platform の登録ファイルの名前は Manager_config.xml で、最初のタグは <Suite> です。新規インストールでこのファイルを登録するには、populateDb ユーティリティを使用するか、「IBM Marketing Platform インストール・ガイド」の説明に従って Marketing Platform インストーラーを再実行します。
- 初期インストールの後、Marketing Platform 以外の製品を再び登録するには、-r オプションおよび -o とともに configTool を使用して、既存のプロパティを上書きします。

-u productName

productName によって指定されるアプリケーションを登録解除します。製品カテゴリーにパスを組み込む必要はありません。製品名で十分です。productName パラメーターは、上にリストしたものの 1 つでなければなりません。これにより、その製品のすべてのプロパティおよび構成設定が削除されます。

オプション

-o

-i または -r とともに使用すると、既存のカテゴリーまたは製品の登録（ノード）を上書きします。

-d とともに使用すると、「構成」ページで「**カテゴリーの削除**」リンクを持たないカテゴリー（ノード）を削除できます。

例

- Marketing Platform インストールの下の conf ディレクトリーにあるファイル Product_config.xml から構成設定をインポートします。

```
configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml
```

- 提供されている Campaign データ・ソース・テンプレートのいずれかをデフォルトの Campaign パーティション partition1 にインポートします。この例では、Oracle データ・ソース・テンプレート OracleTemplate.xml が Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーに置かれていることが前提です。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f OracleTemplate.xml
```

- すべての構成設定を D:¥backups ディレクトリーにあるファイル myConfig.xml にエクスポートします。

```
configTool -x -f D:¥backups¥myConfig.xml
```

- 既存の Campaign パーティション（データ・ソース・エントリを備えている）をエクスポートし、ファイル partitionTemplate.xml に保存し、Marketing Platform インストールの下のデフォルトの tools/bin ディレクトリーに保管します。

```
configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f partitionTemplate.xml
```

- Marketing Platform インストールの下でのデフォルトの `tools/bin` ディレクトリーにあるファイル `app_config.xml` を使用してアプリケーション `productName` を手動で登録し、このアプリケーションの既存の登録の上書きを強制します。

```
configTool -r product Name -f app_config.xml -o
```

- アプリケーション `productName` を登録解除します。

```
configTool -u productName
```

alertConfigTool ユーティリティー

通知タイプは、さまざまな IBM EMM 製品に固有のものです。インストール時またはアップグレード時にインストーラーが自動的に通知タイプを登録しなかった場合は、`alertConfigTool` ユーティリティーを使用して登録してください。

構文

```
alertConfigTool -i -f importFile
```

コマンド

-i -f importFile

指定した XML ファイルからアラートと通知のタイプをインポートします。

例

- Marketing Platform インストール済み環境の `tools\bin` ディレクトリーにある `Platform_alerts_configuration.xml` という名前のファイルからアラートと通知のタイプをインポートします。

```
alertConfigTool -i -f Platform_alerts_configuration.xml
```

datafilteringScriptTool ユーティリティー

`datafilteringScriptTool` ユーティリティーは、XML ファイルを読み取って、Marketing Platform システム・テーブル・データベースのデータ・フィルター・テーブルにデータを設定します。

XML をどのように書くかに応じて、このユーティリティーには使用方法が 2 つあります。

- XML 要素の 1 つのセットを使用して、フィールド値の一意の組み合わせに基づいてデータ・フィルター（一意の組み合わせごとに 1 つのデータ・フィルター）を自動生成します。
- XML 要素の若干異なるセットを使用して、ユーティリティーによって作成される各データ・フィルターを指定することができます。

XML の作成について詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

datafilteringScriptTool を使用する場合

datafilteringScriptTool は、新規データ・フィルターを作成するときに使用する必要があります。

前提条件

Marketing Platform を配置し、実行しておく必要があります。

SSL との datafilteringScriptTool の使用

片方向 SSL を使用して Marketing Platform を配置している場合、datafilteringScriptTool スクリプトを変更し、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加する必要があります。スクリプトを変更するには、以下の情報が必要です。

- トラストストア・ファイル名とパス
- トラストストア・パスワード

テキスト・エディターで、datafilteringScriptTool スクリプト (.bat または .sh) を開き、次のような行を見つけます (例は Windows バージョンの場合)。

```
:call exec
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

この行を次のように編集します (新規テキストが太字で示します)。

myTrustStore.jks および myPassword は、ご自分のトラストストア・パスとファイル名およびトラストストア・パスワードに置き換えてください。

```
:call exec
```

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStore="C:\security\myTrustStore.jks"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=myPassword
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
```

```
%SSL_OPTIONS%
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

構文

```
datafilteringScriptTool -r pathfile
```

コマンド

```
-r path_file
```

指定された XML ファイルからデータ・フィルターの仕様をインポートします。インストールの下に tools/bin ディレクトリーにファイルがない場合、パスを指定

し、`path_file` パラメーターを二重引用符で囲みます。

例

- `C:\%unica%\xml` ディレクトリーにあるファイル `collaborateDataFilters.xml` を使用して、データ・フィルター・システム・テーブルにデータを設定します。

```
datafilteringScriptTool -r "C:\%unica%\xml\collaborateDataFilters.xml"
```

encryptPasswords ユーティリティー

`encryptPasswords` ユーティリティーは、Marketing Platform が使用する以下の 2 つのパスワードのうちのいずれかを暗号化して保管するために使用します。

- Marketing Platform がシステム・テーブルにアクセスするために使用するパスワード。このユーティリティーは、既存の暗号化パスワード (Marketing Platform インストールの下の `tools\bin` ディレクトリーにある `jdbc.properties` ファイルに保管されている) を新規パスワードで置き換えます。
- Marketing Platform または Web アプリケーション・サーバーによって提供されるデフォルトの証明書以外の証明書で SSL を一緒に使用するよう構成されたときに、Marketing Platform によって使用される鍵ストア・パスワード。証明書は、自己署名証明書か認証局からの証明書のいずれかになります。

encryptPasswords を使用する場合

`encryptPasswords` は、以下の理由で使用します。

- Marketing Platform システム・テーブル・データベースにアクセスするために使用されるアカウントのパスワードを変更する場合。
- 自己署名証明書を作成したとき、または認証局から証明書を取得した場合。

前提条件

- `encryptPasswords` を実行して新規データベース・パスワードを暗号化して保管する前に、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにある `jdbc.properties` ファイルのバックアップ・コピーを作成しておきます。
- `encryptPasswords` を実行して鍵ストア・パスワードを暗号化して保管する前に、デジタル証明書を作成または取得し、鍵ストア・パスワードを覚えておく必要があります。

その他の前提条件は、61 ページの『付録 A. Marketing Platform ユーティリティーについて』を参照してください。

構文

```
encryptPasswords -d databasePassword
```

```
encryptPasswords -k keystorePassword
```

コマンド

-d *databasePassword*

データベース・パスワードを暗号化します。

-k keystorePassword

鍵ストア・パスワードを暗号化し、ファイル pfile に保管します。

例

- Marketing Platform をインストールした時に、システム・テーブル・データベース・アカウントのログインが myLogin に設定されています。インストール後のある時に、このアカウントのパスワードを newPassword に変更します。
encryptPasswords を以下のように実行し、データベース・パスワードを暗号化して保管します。

```
encryptPasswords -d newPassword
```

- SSL を使用するように IBM EMM アプリケーションを構成し、デジタル証明書を作成または取得しました。encryptPasswords を以下のように実行し、鍵ストア・パスワードを暗号化および保管します。

```
encryptPasswords -k myPassword
```

partitionTool ユーティリティー

パーティションは Campaign ポリシーおよび役割と関連付けられます。これらのポリシーおよび役割、およびそのパーティションとの関連付けは Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。partitionTool ユーティリティーは、パーティションの基本ポリシーおよび役割情報で Marketing Platform システム・テーブルをシードします。

partitionTool を使用する場合

作成するパーティションごとに、partitionTool を使用して、基本ポリシーおよび役割情報で Marketing Platform システム・テーブルをシードする必要があります。

Campaign での複数パーティションの設定については、ご使用のバージョンの Campaign に該当するインストール・ガイドを参照してください。

特殊文字とスペース

パーティションの説明、またはユーザー、グループ、あるいはパーティションの名前にスペースが含まれる場合、それらを二重引用符で囲む必要があります。

追加の制限については、61 ページの『付録 A. Marketing Platform ユーティリティーについて』を参照してください。

構文

```
partitionTool -c -s sourcePartition -n newPartitionName [-u  
admin_user_name] [-d partitionDescription] [-g groupName]
```

コマンド

partitionTool ユーティリティーでは、以下のコマンドを使用できます。

-c

-s オプションを使用して指定する既存のパーティションのポリシーおよび役割を複製 (クローンを作成) し、-n オプションを使用して指定する名前を使用します。これらのオプションはどちらも c で必要です。このコマンドは、以下を行います。

- Campaign で、管理役割ポリシーとグローバル・ポリシーの両方に管理者の役割を持つ新規 IBM EMM ユーザーを作成します。指定するパーティション名は、このユーザーのパスワードとして自動的に設定されます。
- 新規 Marketing Platform グループを作成し、新規管理ユーザーをそのグループのメンバーにします。
- 新規パーティション・オブジェクトを作成します。
- ソース・パーティションに関連付けられているすべてのポリシーを複製し、それらを新規パーティションに関連付けます。
- 複製されるポリシーごとに、そのポリシーに関連付けられているすべての役割を複製します。
- 複製される役割ごとに、ソース役割でマップされた方法と同じ方法ですべての機能をマップします。
- 新規 Marketing Platform グループを、役割の複製時に作成される最後のシステム定義の管理役割に割り当てます。デフォルト・パーティション partition1 を複製する場合、この役割はデフォルトの管理役割 (管理) になります。

オプション

-d *partitionDescription*

オプション。-c と共にのみ使用されます。-list コマンドからの出力に表示される説明を指定します。256 文字以下でなければなりません。説明にスペースが含まれる場合は二重引用符で囲みます。

-g *groupName*

オプション。-c と共にのみ使用されます。ユーティリティーによって作成される Marketing Platform 管理グループの名前を指定します。名前は、この Marketing Platform のインスタンス内で固有でなければなりません。

定義されない場合、名前はデフォルトの partition_nameAdminGroup になります。

-n *partitionName*

-list ではオプションで、-c では必須です。32 文字以下でなければなりません。

-list と共に使用する場合、情報をリストするパーティションを指定します。

-c と共に使用する場合、新規パーティションの名前を指定します。指定するパーティション名は、管理ユーザーのパスワードとして使用されます。パーティション名は、「構成」ページでパーティション・テンプレートを使用してパーティションを構成したときに付けた名前と一致する必要があります。

-s *sourcePartition*

必須。-c とのみ使用されます。複製されるソース・パーティションの名前。

-u *adminUserName*

オプション。-c と共にのみ使用されます。複製されるパーティションの管理ユーザーのユーザー名を指定します。名前は、この Marketing Platform のインスタンス内で固有でなければなりません。

定義されない場合、名前はデフォルトの *partitionNameAdminUser* になります。

パーティション名は、このユーザーのパスワードとして自動的に設定されます。

例

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。

- partition1 から複製
- パーティション名は myPartition
- デフォルト名 (myPartitionAdminUser) およびパスワード (myPartition) を使用
- デフォルト・グループ名 (myPartitionAdminGroup) を使用
- 説明は「ClonedFromPartition1」

```
partitionTool -c -s partition1 -n myPartition -d "ClonedFromPartition1"
```

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。

- partition1 から複製
- パーティション名は partition2
- ユーザー名 customerA を指定し、自動的に割り当てられるパスワード partition2 を使用
- グループ名 customerAGroup を指定
- 説明は「PartitionForCustomerAGroup」

```
partitionTool -c -s partition1 -n partition2 -u customerA -g customerAGroup -d "PartitionForCustomerAGroup"
```

populateDb ユーティリティー

populateDb ユーティリティーは、デフォルト (シード) データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。

IBM インストーラーは、Marketing Platform および Campaign のデフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに設定することができます。しかし、会社の方針でインストーラーによるデータベースの変更が許可されていない場合、またはインストーラーが Marketing Platform システム・テーブルに接続できない場合、このユーティリティーを使用して Marketing Platform システム・テーブルにデフォルト・データを挿入する必要があります。

Campaign の場合、このデータには、デフォルト・パーティションのセキュリティ役割および権限が含まれます。Marketing Platform の場合、このデータには、デフォルト・パーティションのセキュリティ役割および権限と、デフォルトのユーザーおよびグループが含まれます。

構文

```
populateDb -n productName
```

コマンド

```
-n productName
```

デフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。有効な製品名は Manager (Marketing Platform の場合) および Campaign (Campaign の場合) です。

例

-

Marketing Platform デフォルト・データを手動で挿入します。

```
populateDb -n Manager
```

-

Campaign デフォルト・データを手動で挿入します。

```
populateDb -n Campaign
```

restoreAccess ユーティリティー

restoreAccess ユーティリティーは、間違えて PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザーをロックアウトしてしまった場合や、Marketing Platform にログインすることができなくなった場合に、Marketing Platform へのアクセスを復元するために使用できます。

restoreAccess を使用する場合

restoreAccess は、このセクションで説明されている 2 つの状況下で使用できます。

PlatformAdminRole ユーザーが無効になっている

Marketing Platform の PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザーがシステムで無効になる可能性があります。以下に、platform_admin ユーザー・アカウントがどのように無効になるかを示す例を示します。 PlatformAdminRole 権限を持つユーザーが 1 人 (platform_admin ユーザー) だけであるとします。「構成」ページの「全般」パスワード設定」カテゴリーの「許可されるログイン再試行の最大回数」プロパティが 3 に設定されており、platform_admin としてログインを試みているユーザーが間違ったパスワードを連続 3 回入力するとします。このログイン試行の失敗が原因で、platform_admin アカウントはシステム内で無効になります。

この場合、restoreAccess を使用すると、Web インターフェースにアクセスせずに、PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを Marketing Platform システム・テーブルに追加することができます。

このように restoreAccess を実行すると、このユーティリティーは、指定したログイン名とパスワードおよび PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。

指定したユーザー・ログイン名が内部ユーザーとして Marketing Platform に存在する場合、そのユーザーのパスワードが変更されます。

ログイン名 PlatformAdmin および PlatformAdminRole 権限を持つユーザーだけが、例外なくすべてのダッシュボードを管理することができます。そのため、platform_admin ユーザーが無効になっていて、restoreAccess によってユーザーを作成する場合、ログインとして platform_admin を持つユーザーを作成する必要があります。

Active Directory 統合の構成が不適切である

構成が不適切な Windows Active Directory 統合を実装してログインできなくなった場合、restoreAccess を使用して、ログインを行えるようにします。

このように restoreAccess を実行すると、このユーティリティーは、「Platform | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値を「Windows 統合ログイン」から「Marketing Platform」に変更します。この変更により、ロックアウトされる前に存在していたユーザー・アカウントを使ってログインできるようになります。オプションで、新規ログイン名およびパスワードを指定することもできます。このように restoreAccess ユーティリティーを使用する場合、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

パスワードに関する考慮事項

restoreAccess を使用する際は、パスワードに関する以下の点に注意してください。

- restoreAccess ユーティリティーでは空のパスワードがサポートされておらず、パスワード規則は適用されません。
- 使用中のユーザー名を指定すると、そのユーザーのパスワードはユーティリティーによってリセットされます。

構文

```
restoreAccess -u loginName -p password
```

```
restoreAccess -r
```

コマンド

-r

-u *loginName* オプションを指定せずに使用した場合は、「Platform | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値を Marketing Platform にリセットします。有効にするには Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

-u *loginName* オプションとともに使用すると、PlatformAdminRole ユーザーが作成されます。

オプション

-u *loginName*

PlatformAdminRole 権限を持ち、指定されたログイン名のユーザーを作成します。
-p オプションとともに使用する必要があります。

-p password

作成するユーザーのパスワードを指定します。 -u で必要です。

例

- PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -u tempUser -p tempPassword
```

- ログイン方法の値を「IBM Marketing Platform」に変更し、PlatformAdminRole 特権を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -r -u tempUser -p tempPassword
```

scheduler_console_client ユーティリティー

IBM EMM スケジューラーで構成されるジョブがトリガーを listen するようにセットアップされている場合、このユーティリティーによってジョブをリストし、開始することができます。

SSL が有効な場合の処置

SSL を使用するように Marketing Platform Web アプリケーションが構成されている場合、scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JVM は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書と同じ SSL 証明書を使用する必要があります。

SSL 証明書をインポートするには、以下のステップを実行します。

- scheduler_console_client によって使用される JRE の場所を判別します。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されている場合、それが指す JRE が、scheduler_console_client ユーティリティーによって使用される JRE です。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されていない場合、scheduler_console_client ユーティリティーは、Marketing Platform インストールの tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトかコマンド・ラインのいずれかで設定される JRE を使用します。
- Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書を scheduler_console_client が使用する JRE にインポートします。

Sun JDK には、証明書のインポートに使用できる keytool というプログラムが含まれています。このプログラムについて詳しくは、Java の資料を参照してください。あるいは、プログラムを実行するときに -help を入力してヘルプにアクセスしてください。

- テキスト・エディターで `tools/bin/schedulerconsoleclient` ファイルを開き、以下のプロパティを追加します。これらは、Marketing Platform が配置される Web アプリケーション・サーバーによって異なります。
- WebSphere の場合、以下のプロパティをファイルに追加します。

```
-Djavax.net.ssl.keyStoreType=JKS
-Djavax.net.ssl.keyStore="鍵ストア JKS ファイルへのパス"
-Djavax.net.ssl.keyStorePassword="鍵ストアのパスワード"
-Djavax.net.ssl.trustStore="トラストストア JKS ファイルへのパス"
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword="トラストストアのパスワード"
-DUseIBMSSLSocketFactory=false
```

- WebLogic の場合、以下のプロパティをファイルに追加します。

```
-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
-Djavax.net.ssl.trustStore="トラストストア JKS ファイルへのパス"
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword="トラストストアのパスワード"
```

証明書が一致しない場合、Marketing Platform ログ・ファイルに以下のようなエラーが入ります。

原因: `sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException`: 要求されているターゲットへの有効な証明書パスが見つかりません (Caused by: `sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: unable to find valid certification path to requested target`)

前提条件

Marketing Platform がインストール、配置、および実行されている必要があります。

構文

```
scheduler_console_client -v -t trigger_name user_name
```

```
scheduler_console_client -s -t trigger_name user_name
```

コマンド

-v

指定されたトリガーを `listen` するように構成されているスケジューラー・ジョブをリストします。

-t オプションとともに使用する必要があります。

-s

指定されたトリガーを送信します。

-t オプションとともに使用する必要があります。

オプション

-t *trigger_name*

スケジューラーで構成されるトリガーの名前。

例

- トリガー trigger1 を listen するように構成されているジョブをリストします。

```
scheduler_console_client -v -t trigger1
```

- トリガー trigger1 を listen するように構成されているジョブを実行します。

```
scheduler_console_client -s -t trigger1
```

Marketing Platform SQL スクリプトについて

このセクションでは、Marketing Platform システム・テーブルに関する各種タスクを実行するための Marketing Platform で提供されている SQL スクリプトについて説明します。それらのスクリプトは、Marketing Platform システム・テーブルに対して実行されるように設計されています。

Marketing Platform SQL スクリプトは、Marketing Platform インストールの下の db ディレクトリーにあります。

データベース・クライアントを使用して SQL を Marketing Platform システム・テーブルに対して実行する必要があります。

参照: Marketing Platform SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform SQL スクリプトについて説明します。

すべてのデータの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)

ManagerSchema_DeleteAll.sql スクリプトは、テーブルそのものは削除せずに Marketing Platform システム・テーブルからすべてのデータを削除します。このスクリプトは、すべてのユーザー、グループ、セキュリティ資格情報、データ・フィルタ、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用する場合

破損データによって Marketing Platform のインスタンスが使用できない場合に、ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用することもできます。

追加要件

ManagerSchema_DeleteAll.sql の実行後に Marketing Platform を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

- 73 ページの『populateDb ユーティリティ』の説明に従って、populateDb ユーティリティを実行します。populateDb ユーティリティは、デフォルトの構

成プロパティ、ユーザー、役割、およびグループを復元しますが、初期インストール後に作成またはインポートしたユーザー、役割、およびグループは復元しません。

- 64 ページの『configTool ユーティリティ』の説明に従って、config_navigation.xml ファイルとともに configTool ユーティリティを使用してメニュー項目をインポートします。
- いずれかのインストール後構成 (データ・フィルターの作成や LDAP サーバーまたは Web アクセス制御プラットフォームとの統合など) を実行している場合、これらの構成を再実行する必要があります。
- 既存のデータ・フィルターを復元する場合、最初に作成された XML を使用してデータ・フィルターを指定し、datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。

データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトは、データ・フィルター・テーブルそのものは削除せずに Marketing Platform システム・テーブルからすべてのデータ・フィルター・データを削除します。このスクリプトは、すべてのデータ・フィルター、データ・フィルター構成、オーディエンス、およびデータ・フィルターの割り当てを Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用する場合

Marketing Platform システム・テーブルから他のデータは削除せずにすべてのデータ・フィルターを削除する場合に、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用することもできます。

重要: 「デフォルトのテーブル名」および「デフォルトのオーディエンス名」という 2 つのデータ・フィルター・プロパティの値は

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトによって再設定されません。使用するデータ・フィルターでこれらの値が無効になった場合、「構成」ページでこれらの値を手動で設定する必要があります。

システム・テーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql)

ManagerSchema_DropAll.sql スクリプトは、すべての Marketing Platform システム・テーブルをデータベースから削除します。このスクリプトは、すべてのテーブル、ユーザー、グループ、セキュリティ資格情報、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

注: 以前のバージョンの Marketing Platform システム・テーブルが含まれているデータベースに対してこのスクリプトを実行する場合、制約が存在しないことを示すエラー・メッセージをデータベース・クライアントで受け取る可能性があります。これらのメッセージは無視してかまいません。

ManagerSchema_DropAll.sql を使用する場合

引き続き使用するテーブルが他に含まれているデータベースにシステム・テーブルがある Marketing Platform のインスタンスをアンインストールした場合に、

ManagerSchema_DropAll.sql を使用することができます。

追加要件

このスクリプトの実行後に Marketing Platform を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

- 『システム・テーブルの作成』の説明に従って、適切な SQL スクリプトを実行し、システム・テーブルを再作成します。
- 73 ページの『populateDb ユーティリティ』の説明に従って、populateDB ユーティリティを実行します。populateDB ユーティリティを実行すると、デフォルトの構成プロパティ、ユーザー、役割、およびグループが復元されますが、初期インストール後に作成またはインポートしたユーザー、役割、およびグループは復元されません。
- 64 ページの『configTool ユーティリティ』の説明に従って、config_navigation.xml ファイルとともに configTool ユーティリティを使用してメニュー項目をインポートします。
- いずれかのインストール後構成 (データ・フィルターの作成や LDAP サーバーまたは Web アクセス制御プラットフォームとの統合など) を実行している場合、これらの構成を再実行する必要があります。

システム・テーブルの作成

会社の方針でインストーラーを使用して Marketing Platform システム・テーブルを自動で作成することが許可されていない場合、以下の表で説明されているスクリプトを使用して手動で作成します。スクリプトは、示されている順序で実行する必要があります。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	- ManagerSchema_DB2.sql マルチバイト文字 (例えば、中国語、日本語、または韓国語) をサポートする予定の場合、ManagerSchema_DB2_unicode.sql スクリプトを使用します。 - ManagerSchema__DB2_CeateFKConstraints.sql - active_portlets.sql
Microsoft SQL Server	- ManagerSchema_SqlServer.sql - ManagerSchema__SqlServer_CeateFKConstraints.sql - active_portlets.sql
Oracle	- ManagerSchema_Oracle.sql - ManagerSchema__Oracle_CeateFKConstraints.sql - active_portlets.sql

スケジューラー機能 (事前に定義された間隔でフローチャートを実行するように構成することができる) を使用する予定の場合、この機能をサポートするテーブルを

作成する必要もあります。スケジューラー・テーブルを作成するには、以下の表の説明に従って、該当するスクリプトを実行します。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	quartz_db2.sql
Microsoft SQL Server	quartz_sqlServer.sql
Oracle	quartz_oracle.sql

システム・テーブル作成スクリプトを使用する場合

インストーラーによるシステム・テーブルの自動作成を可能にしていない場合、または ManagerSchema_DropAll.sql を使用してすべての Marketing Platform システム・テーブルをデータベースから削除した場合、Marketing Platform をインストールまたはアップグレードするときに、これらのスクリプトを使用する必要があります。

付録 B. IBM 製品のアンインストール

以下のような場合に、IBM 製品のアンインストール操作が必要になることがあります。

- システムの使用を辞める。
- システムから IBM 製品を除去する。
- システムの空きスペースを増やす。

IBM EMM 製品のインストール時に、アンインストーラーが `Uninstall_Product` ディレクトリーに含まれます (*Product* は IBM 製品の名前)。また、Windows では制御パネルの「プログラムの追加と削除」リストに項目が追加されます。

IBM アンインストーラーを実行すると、すべての構成ファイル、インストーラー・レジストリー情報、およびユーザー・データがシステムから確実に除去されます。アンインストーラーを実行する代わりに手動でインストール・ディレクトリーのファイルを除去した場合、将来、同じ場所に IBM 製品を再インストールしたときに不完全なインストールになる可能性があります。製品をアンインストールしても、製品のデータベースは削除されません。アンインストーラーは、インストール中に作成されたデフォルト・ファイルだけを削除します。インストール後に作成もしくは生成されたどんなファイルも削除しません。

IBM 製品をアンインストールするには

IBM 製品をシステムから正しく除去するには、以下の説明に従ってください。

注: UNIX では、IBM EMM をインストールしたのと同じユーザー・アカウントでアンインストーラーを実行する必要があります。

1. アンインストールする IBM 製品が Web アプリケーションを配置した場合は、IBM EMM 製品の Web アプリケーションを WebSphere または WebLogic からアン配置します。
2. WebSphere または WebLogic をシャットダウンします。
3. 除去している製品に関連する実行中のプロセスを停止します。

例えば Campaign または Contact Optimization 製品をアンインストールする前に、これらの製品のリスナー・サービスを停止します。

4. 製品のインストール・ディレクトリーに `ddl` ディレクトリーがあるかどうかを確認して、それが存在する場合には、そこに用意されているスクリプトを実行してシステム・テーブル・データベースからテーブルをドロップすることができます。
5. IBM EMM アンインストーラーを実行して、ウィザードの指示に従います。

アンインストーラーは、`Uninstall_Product` ディレクトリーにあります (*Product* は IBM EMM 製品の名前です)。 `Uninstall_Product` ディレクトリーは、製品のインストール・ディレクトリー内にあります。

不在モードでインストールした製品をアンインストールする場合は、アンインストールも不在モードで実行されます (ユーザーとの対話用のダイアログは表示されません)。

IBM 技術サポートへの連絡

文書を参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM 技術サポートに電話することができます。このセクションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM 技術サポートのコンタクト情報

IBM 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM 製品技術サポートの Web サイト (http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

注: サポート要求を入力するには、IBM アカウントでログインする必要があります。可能な場合、このアカウントは、IBM 顧客番号とリンクされている必要があります。アカウントを IBM 顧客番号に関連付ける方法については、Support Portal の「サポート・リソース」>「ライセンス付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザーに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項を確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件（例えば、プライバシー・ポリシー）への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、

および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用について詳しくは、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』を参照してください。



Printed in Japan